



ただ、受け取るのみ —only receive—

りゅうこくブックス
139

龍谷大学宗教部

ただし、受け取るのみ
—only receive—

龍谷大学「建学の精神」

龍谷大学の「建学の精神」は「浄土真宗の精神」です。

浄土真宗の精神とは、生きとし生けるもの全てを、迷いから悟りへ転換させたいという阿弥陀仏の誓願に他なりません。

迷いとは、自己中心的な見方によって、真実を知らずに自ら苦しみをつくり出しているあり方です。悟りとは自己中心性を離れ、ありのままのすがたをありのままに見ることのできる真実の安らぎのあり方です。

阿弥陀仏の願いに照らされ、自らの自己中心性が顕わにされることにおいて、初めて自己の思想・観点・価値観等を絶対視する硬直した視点から解放され、広く柔らかな視野を獲得することができるのです。

本学は、阿弥陀仏の願いに生かされ、真実の道を歩まれた親鸞聖人の生き方に学び、「真実を求める、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間を育成します。このことを実現できる心として以下5項目にまとめています。これらはみな、建学の精神あってこそその心であり、生き方です。

すべてのいのちを大切にする「平等」の心

真実を求める真実に生きる「自立」の心

常にわが身をかえりみる「内省」の心

生かされていることへの「感謝」の心

人類の対話と共に存を願う「平和」の心

目 次

顯淨土の願い

悪人が目当てなら……

世界に響きわたる「他力の信心」

モンゴル帝国の真実

—人命重視の戦争と信仰尊重の統治—

受け継がれるもの

一 樂 真

井 上 見 淳

葛 野 洋 明

村 岡 優

北 岳 大 至

109

89

69

37

5

龍谷大学宗教部は、大学内外からお招きした講師の講話・講演を活字化し、「建学の精神」を普及し体現するために『りゅうこくブックス』を刊行しております。

宗教部主催の法要・講演会には以下のようなものがあります。

- ・授業期間中 毎月十五日 深草学舎 顯真館にて お逮夜法要
- ・授業期間中 毎月十六日 大宮学舎 本館にて ご命日法要
- ・授業期間中 毎月二十一日 瀬田学舎 樹心館にて ご生誕法要
- ・毎期一回水曜日 顯真アワー
- ・五月二十一日 降誕会
- ・十月十八日 報恩講
- ・公開講演会 など

ブックスを講読していただきとともに、可能であれば各会場にもおまいりくださいませ。

(一〇一二年十月十八日 報恩講法要 深草学舎)

顯淨土の願い

一 樂 真

(大谷大學 學長)



一樂 真 (いちらく まこと)

1957年、石川県出身。

大谷大学文学部真宗学科卒業。

大谷大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。

現在、大谷大学教授。

【著作】

『大無量寿經講義－尊者阿難、座より起ち－』(文栄堂書店／2004年)

『真宗入門 親鸞聖人に学ぶ』(東本願寺出版部／2007年)

『この世を生きる念佛の教え』(東本願寺出版部／2008年)

『四十八願概説－法藏菩薩の願いに聞く－』(文栄堂書店／2009年)

『親鸞の教化－和語聖教の世界－』(筑摩書房／2010年)

『阿弥陀經入門』(東本願寺出版部／2020年)

ほか多数。

講題

ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する
恵日なり。

（『顕淨土真実教行証文類』／『淨土真宗聖典—註釈版—』 一三一頁）

おはようございます。ご紹介にあずかりました一楽と申します。現在、大谷大学の学長を務めておりますけれども、これは単に長く大谷大学に育てられているということでありますし、もともと石川県の小松の大谷派の寺の生まれで、十九歳の時に京都に出てきました。それからずっと大谷大学に居りますので、ときどき卒業生が来ると「先生まだ居るんですか」と言われたりすることがあります。まあ十九歳から数えて今年で四十九年目という恐ろしい年月が経ちました。ただ自分を育ててくれた大学ですので、なんとか微力を尽くしたいというふうに思っています。

先ほど学長の入澤先生から、龍谷大学の親鸞聖人の報恩講は、学寮を創設した良如上人のご命日を縁として勤めているとお話しくださいました。大変、莊厳な雰囲気の中で、そしてまた親鸞

聖人がお書きになられたお名号の前で法要をお勤めし、お話をさせていただくというご縁を頂戴したこと、本当に身が引き締まる思いです。

今日は、「顕淨土の願い」という題名をつけさせていただきました。親鸞聖人の主著である『教行信証』、正式な名称は『顕淨土真実教行証文類』といいますが、はじめの「顕淨土」というところを題名にさせていただいたわけです。

親鸞聖人が何を願われたのか、一言でいえば、この南無阿弥陀仏のお名号に尽きます。このことを何とか同時代の人にも、また未来の私たちにも伝えたい、それが親鸞聖人のお心だったと思します。しかしこのインド由来の南無阿弥陀仏、そう簡単に私たちにストンと届くかどうか難しいです。例えば私自身のことで言えば、お寺に生まれて子どもの時からずっとこの言葉を聞いておりましたけれども、私のための言葉だとはほとんど思っていませんでした。

誰か必要な人が居るのかとか、もっと言うとあんなことを言つて何になるんだろうかと、子どもの頃思っていました。ですから親鸞聖人が大事になさった南無阿弥陀仏の一言は、少なくとも私の場合、大谷大学で学ぶということがなかつたら一向に届かなかつたわけであります。そういう

たこともお考えになつて、南無阿弥陀仏のお心を一番詳しく述べになつたのが、『顕淨土真実教行証文類』というお書物であります。でもたくさん勉強しなさいとか、たくさんの言葉を覚えなさいという意味じやなくて、教えるのはここですということを、はじめにおっしゃつてくださつています。

それだけではわからない場合は、なぜ南無阿弥陀仏なのか、阿弥陀とは何なのか、唱えてどうなるのか、ここを知りたい人は是非とも『教行信証』を読んでくれと、そんな思いが親鸞聖人にあると思います。特に「淨土」といわれてもなかなか難しいですね。学生にもよく言われるのですが、「昔の人なら淨土を信じられたかもしれませんけど、西にある淨土なんて言われてもずっと西に行つたらまた京都戻つてくるやないですか」と。地球は丸いということを皆さんご存じですから。でもそういう意味の西ではないはずですね。

じゃあ淨土って何なのか。命を終えて帰る世界としても語られますが、現在の私たちにどう関わるのか？ そのことを親鸞聖人がどんなふうに願われたのか、ということを尋ねたくて、こういう題をつけさせていただいたわけです。

宗とは何か

親鸞聖人は、法然上人を宗祖として生きられました。これについて驚かれる人もあるかもしれませんね。親鸞聖人はご自身が浄土真宗を開いたとはおっしゃいません。浄土真宗を開いたのは法然上人であると明確におっしゃる。その教えを親鸞聖人もいただかれて生きられたのです。高僧和讃から一首だけひいてみます。

智慧光のちからより 本師源空あらはれて

浄土真宗を開きつつ 選択本願のべたまふ

（『高僧和讃』／『浄土真宗聖典—註釈版—』五九五頁）

「智慧光のちから」は阿弥陀仏の智慧の光、そのはたらきの中から法然上人は私たちのところに現れてくださった。そして浄土真宗を開いて阿弥陀仏の選択本願を述べてくださった、私たちにそのことを教えてくださったというご和讃であります。ここに浄土真宗を開かれたのは法然上

人だと明確におっしゃっておられます。念のために言いますが淨土真宗とは宗派の話ではありません。親鸞聖人はお寺を持っておられたわけではありません。最晩年も親類のところあるいは知り合いのところに身を寄せて仮住まいの京都生活がありました。そういう意味では教団、宗派が出来上がっていくのは親鸞聖人の没後のことです。

ここでいう淨土真宗とは人間にとつての拠り所という意味です。真の宗むねと書いてあります。ムネというのは面白い大和言葉で物事の中心を表します。身体でいえば胸です。建物は必ず棟上げむねをします。もちろん漢字は全部違いますが、それがないと成り立たない。

中心を表すのがムネという大和言葉です。そしてこれは宗教の宗むねという字を書きます。宗となる教えのことを宗教むねというわけですが、私は何を宗としているか？ 現在は無宗教と公言される方も非常に多いですが、でも無宗教という人も宗がないわけではありません。大事にしておられることが、これだけは譲れないという宗、皆さんお持ちだと思います。

極端な言い方をすれば無宗教ということを宗にしていると、こう言つてもいいかもしません。別な言い方をすると、多くの人が、信仰する教団も教祖も持たないけれども、「役に立つか立た

ないか」というような宗に多くの人が引っ張られているかもしれません。もつと言えば、すべてが経済効率あるいは結果主義、効率主義というような、そういう宗にがんじがらめになつてゐるかもしれません。親鸞聖人がおっしゃる真宗というのは、それ本当ですか？ という意味なんですね。

本当というのは状況が変わつても変わることのないものを真の宗、真宗と言います。例えば元気な時は元気が取柄と言いますけども、じゃあ病気になつたらどうなるんでしょうか。人一倍身体が動くこと、それは嬉しいですけども動けなくなつたら自分に価値がないとなつてしまふんでしようか。だから身体が動くとか健康であることは嬉しいことですけれども、その拠り所は状況が変わつたら崩れてしまします。それは真宗とは言わないんですね。

ですから、親鸞聖人は「浄土」が真宗です、阿弥陀仏の浄土こそがいつでも変わることのない本当の拠り所ですよ、ということを教えてくださつたのです。これが浄土真宗という言葉であります。

もちろん親鸞聖人はそれを押し付けておられるわけではなく、「私は本当の拠り所、真宗に出

あうことができました」ということを喜ばれて、そしてそれを私たちに伝えてくださつていると
いうことがあります。「それをお取りになるかお捨てになるか、それはお一人おひとりお考えく
ださい」と投げかけられていると言つていいと思います。

ただ親鸞聖人はこの真宗がどれほど大事かということを掲げられているのが、浄土を顕かにす
るという顕淨土の願いだというふうに私はいただいております。『教行信証』の最後の部分には「真
宗興隆の大祖、源空法師」、つまり真宗の宗祖は法然上人です。と明確に言つておられます。法
然上人がお出ましにならなかつたならば私たちは何が本当に大事なことなのかわからずに人生を
終えたに違ひないという、こういう思いが親鸞聖人にはあるわけであります。

『教行信証』を書かれた時のお名前が、「愚禿釈親鸞」という名前になつています。またこの名
号にも「愚禿親鸞八四歳書之」と書いておられます。愚禿というのは愚か。禿というのは僧侶で
もないし俗人でもないという社会的な在り方をお示しくださつております。名前の一番上に愚か
という字がついていますが、これは他人と比べて劣つてゐるとか、自己評価が高い低いという意
味ではありません。どれほど知識があろうと、過ちを犯していく人間の危うさを愚か、と言つて

いるわけです。現代はまさにそうですよね。科学技術、医療技術はどれほど進んだか。しかしそれがかえって人を苦しめることも起きるわけです。人を傷つけることにもなる。そういう危うさを愚か、というふうにおっしゃっておられる。このお名前は九十歳で亡くなられるまで外しておられません。だから仏教を勉強したからもう大丈夫だということじやないんですね。

もう間違いを犯さないとか、危うい自分は卒業しましたということをおっしゃらないのが親鸞聖人です。ここに立つて阿弥陀の教えあるいはお釈迦さまの教え、そして先達の教えを引き続けていかれたのが親鸞聖人のご生涯だと思います。ですから私が本当のことを教えてやるぞというそんな人ではないのです。親鸞聖人ご自身が先達の見いだされてきた浄土真宗ということ、これを大事に大事にいただかれていった人だと思います。浄土真宗に出遇い、浄土真宗に生き、浄土真宗を顕らかにされた人であつたわけです。

法藏菩薩が示した浄土の願い

それでは、浄土の教えとは何なのか。これはとても簡単に言えることではありませんね。「正信

偈」に、「阿弥陀仏が法藏菩薩であつた時、因の位の時に世自在王仏という仏さまにお会いになつて、諸仏淨土の因、国土人天の善惡を観見して」というお言葉があります。「観見」というのはしつかり見たという意味ですね。これも学生たちによく質問されます。「諸仏、たくさんの仏さまが淨土をお建てになつた、その因を尋ねたというのはわかるけれども国土人天の善惡を見るつてどういうことですか、仏さまの国なのに悪があるんですか」と。なるほどと思います。でもよく考えてみれば、お釈迦さまは二五〇〇年前のインドにお出ましですね。お釈迦さまが出たからといって人間が傷つけ合わなくなつたか。そんなわけにいきません。差別はなくなつたかと。そんなわけにはいきません。そういう現実があるからこそ、その中で痛ましい在り方、争いを超えないさいよということを生涯かけて呼びかけ続けていかれたのがお釈迦さまですね。お釈迦さまの国にも傷つけ合つたり、苦しみあつたりすることが渦巻いていた。そこにお出ましになつたのがお釈迦さまです。

お釈迦さまはそれをどう超えようとなさつたか。そういうような意味で諸仏淨土の因、国土人天の善惡を観見した、こういうふうに言うことができます。人間が傷つき合う現状を、じつと見尽くしたのが法藏菩薩なんですね。そして、争いを超える世界、これを建てたのが「無上殊勝の

願を建立し、希有の大弘誓を超発せり」、という言葉になっています。これが四十八願、先ほどで言えば選択本願という言葉で語られる内容として『大無量寿經』には出てくるわけであります。

もう一つ「文類偈」という、『淨土文類聚鈔』に出る偈文から一句挙げさせていただきます。

如來の功德は、ただ仏のみ知ろしめせり。

仏法藏を集めて凡愚に施す。

（『淨土文類聚鈔』／『淨土真宗聖典—註釈版』 四八五頁）

「仏法藏」は「仏の法藏」と読むと意味がはつきりします。「仏の法藏を集めて凡愚に施す」とは、たくさんの仏さまの教えの蔵を集められた、これが法藏菩薩だということです。「正信偈」には、数多くの諸仏さまの国（お經では二二〇億という数が出ています）をご覧になつて、これは痛ましい、これを超えるにはどうしたらいいかということを学びに学ばれたわけであります。これも学生からよく質問を受けます。「法藏菩薩つてどこの国の人ですか？」と。「男だったんですね

か？ 女だったんですか？」とも聞かれますけども、そういう話ではありません。歴史的な歩みの中から明らかになってきた、それを「法の蔵」という名前で呼ぶわけです。

身近な例で恐縮ですが、日本は地震が多い国です。ですから建てては倒れ、建てては倒れとう、そのご苦労の中から倒れない建物をどうしたら造れるかということが考えられてきたわけでしょう。例えば五重の塔の心柱は下についてないということ、これが現代のスカイツリーにまで応用されているということを聞きますね。これは誰か一人が考えたわけじゃないでしょ。建てては倒れ、建てては倒れという、その時に次はこうならないようにという中から知恵の集積として今のスカイツリーが出来ているわけです。これは建築の話でありますけれども人間が生きることについても同じですね。平和で安らかな世界を誰もが願っていると思いますが、残念ながら人間が考える平和は自分の敵を全滅させるという発想しかない。だから平和のためにと言いながらミサイルを落とすんですね。争いが止まらないわけです。そんなことを繰り返してきた歴史は山ほどあるぞ、というのがこの法藏菩薩がたくさんの仏さまの国に学ばれたことであります。ですから、法藏菩薩はどこの国の人で、西暦でいうと何年頃にいたんだというそんな話ではなくて、長い長い人間の歴史と共にこれだけ痛ましいことがあった、それを超えるにはこうしないといけな

いということを、形に示し私たちにわかる言葉にまでなつて教えてくれている。これが法藏菩薩の御本願であります。

浄土というのはどこかにあるエリアとか場所ということではなくて、こんな世界が本当の平和、本当の安らかさ、本当の満足ではないかと示している。恐れやおののきの中で生きるのではなくて、差別を超える争いを超えて生きる世界はこうでないか、ということを形に示してください。これが浄土建立ということの意味なのです。ですからこの世の在り方を痛む心からと書きましたが、この世が痛ましいからこそ、こんな世界が大事じゃないかということを浄土として示さないといけなかった。形を取らないといけなかった。そしてその浄土を教えられるところにこの世の痛ましさを初めて知るわけです。

阿弥陀の「はかれない世界」に生きる

先ほど言ったことで言えば、本当の平和とはどういうことかということを教えられて、初めて爆弾を落とすことが平和にはならないということが見えてくる。自分の痛ましさを初めて知らさ

れる、ということになるわけであります。でもこれも学生たちにはすぐ言われますね。じゃあ先生は誰かに攻められてもそのまま何もせず征服されるのですか、と聞かれます。でもある意味そうかもしれません。釈迦さまの釈迦族というのは滅びていきましたね。隣の大きな国に滅ぼされていった。その意味では仏教には何の力もないと言う人もいます。しかし二五〇〇年の時を越えてそのお釈迦さまの精神、教え、これは残っているんじゃないでしょうか。攻め滅ぼした国は残りましたでしょうか。そういうことも併せて考えなきゃならんと思います。この淨土によつて開かれるもの、それを次にまとめて書いています。

淨土が開くもの

無量寿の世界 ↓未來世の發見 ↓現世主義を超える
無量光の世界 ↓つながりの發見 ↓利己主義を超える

阿弥陀仏の淨土によつて私たちに開かれてくるもの、これなんですね。阿弥陀という言葉はイノドの言葉であります。ア」と「ミタ」という言葉に分解されますね。「ア」というのは否定の言葉です。「ミタ」というのは「はかる」という言葉です。ちょっとそこに書いておけば良かつ

たんですけども、mitaとローマ字では当たりますが、これはメーターとかメジャーという言葉と語源が一緒でありますね。はかるという言葉です。「ア」はそれを否定していますので「はかれない」というのが「ア・ミタ」という言葉です。それを翻訳すると「無量」という言葉になります。

親鸞聖人はこのお言葉を大へん大事にお使いになられます。もちろんこの南無阿弥陀仏、これはお釈迦さまのインド以来の発音ですから、お釈迦さまの声の響きを南無阿弥陀仏でいただくことができますね。その意味をいただく時には「帰命無量寿如来」とおっしゃる。だから私たちの物差しではかれない世界、これが阿弥陀だと教えてくださっているわけです。

でも、そう言われてみると私どもは日頃からはかつてぱっかりですね。勝ったか負けたか、優れているか劣っているか、得か損か、最後には生きている価値があるかないか、生きている資格があるかないか、とまで言っています。人をはかるだけじゃなくて自分に対しても、もうこんな体になつたら生きていらない方がいいと言つたりする。でもそれは本当でしょうか。阿弥陀とは人間のものさしではかれない世界を言います。そういう意味では生まれてこなかつた方がいい命は一

つもない。早く死んだ方がいい命も一つもない。これが人間の物差しではかれない阿弥陀ということによって知らされる具体的なことだと私は思っております。その阿弥陀に触れるとき、はかれないものをはかつていたんだなど、はかる必要のないものに縛られていたなあと気がつくところに開かれるものがある、ということを一つ書きました。一つ目が無量寿の世界、もう一つが無量光の世界です。これが浄土であります。

私たちはどうしてものはかりますね。もちろん元氣で長生きできることはうれしいことです。けれども、短く終わつた命は意味のない命だつたのでしょうか。価値がないのでしょうか。どうですか。早く死んだ命を、あの人的人生は何点です、などとはかれますか。改めて考えてみると一人一人が人生を尽くされたという意味では尊い人生を生き切られたわけですよ。それに上も下も言う必要ないでしょ。にもかかわらずはかつてばかりです。無量寿ということによって、つながりが見えてくるという意味で「未来世の発見」と書きました。

何を言いたいかというと、無量寿という世界が見えませんと自分の寿命の長さだけが全てだと思ってしまいます。今日、入澤学長先生のお話にもあったように、龍谷大学がそれこそ良如上人

以来、学寮を建ててくださった、そこからの歴史がある。さらにさかのばれば親鸞聖人の教えが流れている。どれだけのことがあつて今ここで学びがあるのか、こういうことをおつしやつてくださいましたけれども、日頃はその過去のことも忘れているんじゃないでしょうか。過去のこととをいただいたということになると、今度は私が命終わるとしてもこれだけは未来に伝えたいというものが出でくるんじゃないでしょうか。未来が見えないと、結局は私の人生をどこまで伸ばすかという話になる。これは有量の話です。一〇〇年が一二〇年になったとしてもそれは程度の問題でありまして、無量寿というのは無限の過去から続いてきた命の営み。そこに私も参加し、それを永遠の未来にまで届けていこうという無量寿の世界が見える。そこに狭い狭い限定された個人の何年という時間にこだわることから解放があると思います。

念のために言いますが、六十年七十年の人生、それをつまらんと言つているんじゃないですよ。それはそれで無量寿が見えた時に生きている間、何をさせてもらうかという無量寿の中で有限の仕事を果たしていくことがあります。今日目が覚めたからといって明日覚めるとは限りません。昨日も西田敏行さんが亡くなつたということで、どんな死因かわかりませんけれども本当に朝、目が覚めないとすることもあるんですよ。今日目が覚めたということは実は当たり前じゃ

ない。この命を今日何に使わせてもらうかと、無限の無量寿ということが見えている中での今日と、有量ではかつてもう今日しかないというだけの今日とではだいぶ違うと思います。それを「現世主義を超える」という風に書きました。無量寿という世界が見えませんと、目の前の今だけしさえ良ければと、こういうことになる。

一切有情の世界を照らす光

しかし今私たちが生きていることは未来に何を残していくのか、ということにもつながっているわけであります。それは過去からいたいたものを通して未来を見つめていくことです。そうすると、三世が違つて見えてくると思います。もう一つ無量光の世界と書きました。阿弥陀仏は無量光仏とも言われますね。無量光とは、はかることのできない光ということです。むちゃむちや明るいとか、そんな意味ではありません。このはかることのできない光は横の繋がりを見せてくれると思います。「つなぎりの発見」と書きましたが、私たちはどうしても自分の血縁、あるいは関係のある人を中心のことを考えますね。それがややもすると今度は同じ国民である

か、同じ民族であるか、同じ宗教であるか、と属性でくくってしまうことにもなる。その仲間意識が今度は仲間外れを作っていくことになりますね。考え方が違うというだけで敵になってしまふ。しかし本当に敵がいるのでしょうか。同じ時代を生きる誰もが、自分の人生を大事にしたいと思つているのではないでしようか。

さらに開けば、仏教は「一切有情」という言葉を大事にしてきましたが、近ごろあまり日常では聞かれなくなりましたね。人間中心の世の中になってしまつたんでしょうか。例えば、虫たちがいなかつたら私たちは作物を食べられません。大地の中にいろんな虫たちがいますが、あの虫たちがいないようなところでは作物は育ちませんね。でも虫のおかげで生きているなんて日頃は忘れていています。だから「一切有情」という命のつながりが本当に見えてくると世界に支えられて今の私がここにあるということがわかつてきます。

例えばこの体を私という存在を大事にするにはこの環境そのものは壊れたら成り立たないわけです。身体だけ守れば自分を大事にできるというのは錯覚なんですね。今、八万年に一度という彗星が来ていますね。あの彗星が次にどこに行つてくるのか私は知りませんけれども、その宇宙

空間が釣り合つて地球は銀河系の中、しかも太陽系の第三惑星として存在できているわけでしょう。あと五億年ぐらいすると太陽が膨らんで、地球は飲み込まれるということが予想されていますけれども、今は釣り合つてここにいる。私の身体だけ守ればなんとかなるという話と全く違うんですね。

大きく言えば宇宙の空間、仏教ではこれを虚空と言いますけれども本当に限りない世界を開いてくるこれが無量光のはたらきだというふうに私は思います。それを「利己主義を超える」と書きました。龍谷大学では「利他」ということを非常に大事におっしゃつてくださっていますが、あれはこの利己的なところに陥る私たちのあり方を問うてくださるお言葉だと思います。でも日頃はだいたい現世主義か利己主義に固まっているんじゃないですか。今だけ私だけということです。でもそれは本当に自分自身の人生を大事にすることになるのでしょうか。かえって狭い世界に閉じこもつて周りの人を敵としか見られなくなる、対立関係ばかりを生むかもしれません。

『涅槃経』が説く阿闍世の獲信も浄土の仏道として親鸞聖人は見ておられます。ちょっと今日

お話できませんけれども『教行信証』の中には『涅槃經』から阿闍世の物語が大変長くひかれます。その中には阿弥陀仏とか阿弥陀仏の淨土という単語は出てきません。親を殺して地獄に落ちると悩んでいた阿闍世はお釈迦さまに出会つて生き方が開かれていますが、お釈迦さまの顔を見たから生き方が開かれたという話ではありません。お釈迦さまに出会つて何を教えられたかとすることです。

それが親鸞聖人からすれば阿闍世は二五〇〇年前お釈迦さまにあわれて生き方が大きく転換しましたけれども、言ってみれば私たちにどうては阿弥陀仏に出遇つて、無量寿に出遇い無量光に出遇うということと重なつていて、という風に教えてくださつていて思ひます。

これも学生さんによく聞かれるんですね。親を殺した阿闍世が釈尊の教えを聞いて助かつたといふと、そんなことで助かるなんておかしいと言われます。でもこれは親を殺した過去が消えたわけではありません。清算されたわけじやなくて、逆に自分が目の前の現世主義、あるいは自分だけという利己主義に落ちていたことから解放されたことなんですね。逆に言えば目の前の自分のことしか考えてなかつた。それが結果的には実の親をも敵だと考えて殺していった。邪魔者だ

と思つて殺していった。何とも愚かだつたなあという我が身に気がついたわけです。そこから阿闍世は私のような生き方をあなた方は繰り返さないで欲しいという形で仏法を勧める。周りの人にも自分が教えられた世界を勧めていく阿闍世になりました。これが過去に縛られることからの解放でしよう。やつたことは消えません。しかしその過去を自分のこととして受け止めたところから阿闍世の新たな生き方がスタートした、ということであります。今日はこれ以上お話ししませんが、そのことも『教行信証』の大変大きなボリュームを占めておりますので、併せてご紹介をさせていただきました。

善惡を超えてすべてを包む仏の救い

次にお話するのは「顕淨土の使命」ということで、『顕淨土真実教行証文類』の撰述の事由と書きました。『教行信証』の末尾のところにいわゆる「後序」という箇所があります。ここには『教行信証』の撰述理由について述べられています。親鸞聖人は法然上人によって淨土が本当の拠り所ですよ、と説かれた教えをとても慶ばれました。感動なさつた、嬉しかったんですね。でもそ

れを快く思わなかつた人がおられた。伝統教団、いわば修行をして悟りを開くということを課題にしておられる方からすると、南無阿弥陀仏を唱えたぐらいで助かるなんて、許せなかつたんですね。仏教をなめているのかという話です。修行するのが仏教だろうという発想からすると、口に南無阿弥陀仏を唱えたぐらいで助かるというのはとても許せなかつたのです。

もう一つ問題になつたのは悪人が助かるという教えです。仏教は悪をやめて善を目指しましょうというのが、基本的な教えですね。傷つけ合うことをやめて、傷つけ合わない生き方をしましょうと。それはその通りです。でもその考えをおしすすめた結果、悪ということを仏教が決めていくようになりました。例えば魚を獲つたり、イノシシを獲つたりして生活している人は、殺生という罪を犯しているため罪深いと言われる。そこに親鸞聖人は大きな疑問を持つたんですね。悪人が助からないというなら、仏教は誰のためのものかということです。魚を獲つてくださる方のおかげで私たち魚が食べられるわけです。食べている人間は罪がなくて獲つている人だけ罪があるんでしょうか。

仏教はその罪に悩んでいる人の救いを解くんじやないのか。お釈迦さまは善人、悪人を分け隔

てなさらない。これが仏教の基本ではないのかと。こういう問いが比叡山の修行を降りて法然上人のところに赴くということになつたわけですね。そういう意味で善人悪人を問わない、誰の上にも平等に成り立つ道を法然上人は説かれたわけです、それをもつとはつきり言つたのが、傷つけ合つたりする人間だからこそ教えがいるんだ、という悪人成仏の教えですよ。今日から間違いを犯さないようになるんだつたら、あるいは憎しみの心が消えてなくなるんだつたら、もうお念佛もいりませんわ。淨土もいりません。残念ながら生きている限りそれが消えないという。これがはじめて申し上げた、「愚禿釈親鸞」と名乗られた親鸞聖人の立ち位置であります。

だから愚かな私のため、危うい私のために一生を導く教えがある。それが南無阿弥陀仏だとうことを言つてくださるんですね。それを強調していう時には、悪人だからこそ助けられないといけないので。悪人でも助けてもらえるという教えではありません。傷つけ合うような危うい生き方をする人間だからこそ助かる必要があるわけです。さつき言つた阿闍世もそうです。親を殺すような愚かな人間だからこそ教えに導かれないといけないんですね。

ただ悪人が助かるというのは現在でも、親鸞聖人に好感をもつてゐる人でも疑問を持たれます

ね。親鸞聖人は好きだけども悪人が助かるというのはどうもいただけないとおっしゃる。私は必ずそういう質問が来た時には、じゃああなた善人なんですか、という風に聞くようにしているんです。その時、嫌なこと言うなという顔をされたり、私は善人とは言えないまでも悪いことしないように気をつけていますと言われます。もちろん初対面の人にそんなこと言つたら、もう二度と喋つてくれないかもしませんので、人間関係がでけてからでありますけども、でも詰めていくと、最後は親鸞聖人がおっしゃる通り愚かな私ということが見えてくると思います。

極悪の衆生、愚かだから傷つけ合うことをやめられない。気をつけていても犯してしまう。そういう人間だからこそ仏さまに導かれて今日はどう生きるのか、来年はどう生きるのか、教えられていかないといけないわけです。

話を戻すと、『教行信証』の「後序」に書いてある撰述の事由についてです。親鸞聖人は浄土真宗の教えを誰の上にも成り立つ生きた仏教だと受けとめられました。勉強したとかしないとか、修行ができたとかできないとか関係ない、ましてや性別や生まれた家柄に一切関係のない仏教であると喜ばれた。でも、それが伝統教団からは、これは仏教じやないという風にレッテルを貼ら

れて、そして法然上人以下八人が流罪になりました。四人が首を切られ死罪になりました。六条河原で切られた方もありますね。昔はあそこが刑場だったわけです。そこで首を切られた安樂房という方がおられたのです。念佛を喜んでいただけで、どうして四人も首を切られたか、八人が流罪になつたか。

ここに親鸞聖人は、自分の仲間が罪に問われたという、そんな狭い発想ではなくて、せっかく法然上人によって浄土の真宗が明らかになつたのに、それが見失われていくという危機感を持たれたと思います。これが『教行信証』の執筆ということに踏み切つて行かれる事になるわけであります。そして自分自身も五年間の流人生活を送つたということが述べられています。つまり、誰の上にも生きてはたらくなまらぬ浄土の真宗が見失われていくことの危機感があつたわけです。だから自分の考えを残したいというそんな話じやなくて、浄土真宗の教え、念佛の教え。これが人間にとつて本当に大事だと思う。その思いがこの『教行信証』を書き残されることになつていくわけです。

何歳から書き始められたか断言はできませんが、五十歳ぐらいからは筆を執つておられますね。最後八十五歳ぐらいまで筆を入れ続けておられる。とても長い期間にわたつて書いておられる。

それはどう書けば念佛の大しさ、あるいは浄土の教えが誤解をされずに届けていけるかということで推敲に推敲を重ねられたわけです。これも学生たちに言うと、親鸞聖人って書くの好きやつたんですね、と言うのがいますけども、趣味で書いていたわけじゃありませんね。生涯の使命として書いていると思います。そして最後に申し上げたいのが、じゃあこの浄土というのは、命を終えて帰る世界としても語られますけれども、命を得て帰る世界が見つかったら実は生き方が変わると、今の生き方にも大きな変化をもたらすということを申し上げたいのです。

浄土を念じて生きる

それを最後に「浄土を念じて生きる」と書きました。これも一つ一つのエピソードは長いので割愛させていただきますけれども一つ目に書いたのは、いなかの人々との出遇いと書きました。流罪になつて越後に七年間その後四十二歳から関東にお出になりますが、その中でそれこそ都で出遇つていた人と全く違う方々に出遇います。文字もわからない。世間の常識もよくご存じないということがある。都では善いか悪いかが決められていたんですが、そんなこと言つていたら生

きていけないような厳しい現実の中で生活する人々もいたわけです。しかし親鸞聖人はそこに人間の生の本当の姿を見たと思いますね。親鸞聖人は四十二歳の時、三部経の千部読誦を行っています。

三部経は『大経』『觀経』『阿弥陀経』ですから、これを千セツト読もうとしたらだいたい百日間ぐらいの行なんですね。一日にだいたい十七セツト読めばいいところですから百日間ぐらいかけないといけない。その行を始めるんですけども親鸞聖人は中止してしまいます。それは嫌になつてやめたのではありません。救うものと救われるものという関係を超えた阿弥陀の世界に気づかれたからです。お経の力を借りてとはい、親鸞聖人はなんとかしてほしいという人々の願いを聞き、飢餓でバタバタと人が死んでいるような状況の中でなんとか応答しようとした。ところが自分がいつの間にかお経を読んで助ける側に回つっていたということです。これは今でいう上から目線ということです。介護したり、病気のお見舞いに行く時もお見舞いする方が上といふことはないでしょ。大事な人生を生きているという意味では、同じ人間がいるわけです。介護することを通して、介護されている人から教えられることもいっぱいありますよね。どっちが上という話じゃないわけです。でもお経を読んで助けてやろうと思つてしまつた。そのこと

をそうじやないだろうと思われた。私もこの方も、共々に阿弥陀によつて助けられるお仲間だ
というところに親鸞聖人は立つていかれたんです。これは四十二歳の時のことですが、その十
七年後、再びこの心が出てきた。人の執着の心、自力の心とはよくよく考えなければならぬと
いうことを言つておられます。それぐらい執着は根深いのです。

親鸞聖人といえども二十九歳で法然上人にお出遇いになつて、あとは一本道だったというわけ
ではないのです。いろんな現実の中で戸惑いがあつた。でもそのことを通して原点に立ち返り続
けられた。愚癡釈親鸞として、阿弥陀仏の教えを周りの仲間とともに聞き続けていくという立場
に立たれたわけであります。それを「救う者と救われる者という関係を超えて」と書きました。

もう一つ、『歎異抄』に出てくる「親鸞は弟子一人ももたず候」（『歎異抄』／『淨土真宗聖典一註
釈版』八三五頁）という有名な言葉があります。これは決して俺は弟子を取らない、お前は弟子
じやないから知らないと言つて突っぱねたと、そんな言葉ではありません。私はあなた方を弟子
として付き合つていませんということですね。同じ阿弥陀仏の教えを聞くお仲間ですということ
です。だから、もちろん知識が親鸞聖人の方があつて、それはこういうことですと教えることは

あつたでしょ。法然上人から、こういうことを聞いたということもお伝えになることはあつたでしょ。でも私が救つてやるとか、私が教えてやるというのではないですね。共々にその教えをいただくお仲間として生きられた。これを「師と弟子という関係を超えて」と書きました。これが阿弥陀仏の浄土を念じておられる親鸞聖人の具体的なお姿であり、お言葉であるという風に私はいただいております。

浄土を念ずるというのは決してご本尊の前で、あるいは仏壇の前で私の浄土行きよろしくお願ひします、と言つて念ずることではありません。そうじゃない。阿弥陀仏の浄土をいただいてみると、この世の痛ましさが見える。また自分中心にして人をはかつていた愚かさが見える。そこの人との関係も変わる、世界の見え方も変わつてくるということが起こること、これが具体的な浄土を信じながらこの世を生きるという。そういう生き方だと思います。この意味で、皆さんが帰られた世界に私も帰らせてもらう、そういう浄土の受けとめも大事です。しかしそれは私だけが行く世界じゃないのです。

みんなが帰る世界なんですから、それが明確になる時に、今、この世でのいろんな出来事の見

え方も違つてくるのです。それを聞いてくるのが、この浄土の教えであるということを今日は申し上げたかったわけであります。いろんなことを言つていたらあつという間に時間が来てしました。今回のご縁を頂戴したことに対する感謝申し上げて、今日のお話を終えたいと思います。最後に十遍ほどお念佛をご一緒に頂戴したいと思います。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

【文責宗教部】

(一〇二五年四月十五日 お逮夜法要 深草学舎)

悪人が目当てなら……

井上 見淳

(本学社会学部教授)



井上 見淳 (いのうえ けんじゅん)

1976年生まれ、福岡県出身。

龍谷大学文学部真宗学科卒業。

龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。

現在、龍谷大学社会学部教授。本願寺派司教。博士（文学・龍谷大学）。

【著作】

『心にひびく言葉』（本願寺出版社／2016年）

『（勧学寮）親鸞聖人の教え』（編著、本願寺出版社／2017年）

『親鸞教義の諸問題』（編著、永田文昌堂／2017年）

『日々の暮らしと、歎異抄』（本願寺出版社／2021年）

『いつでも歎異抄』（監修・共著、本願寺出版社／2021年）

『真宗悪人伝』（法藏館／2021年）

『「たすけたまへ」の浄土教－三業帰命説の源泉と展開－』

（法藏館／2022年）

ほか多数。

皆さま、本日はお忙しいお昼休みのさなかに、お参りくださいましてありがとうございます。社会学部の井上見淳と申します。今日は「お逮夜法要」です。「逮」という字は「およぶ」という意味があり、ご命日に逮ぶ前夜ということです。龍谷大学では親鸞聖人のご命日である十六日のお前日、つまり十五日をお逮夜法要として伝統的に毎月お勤めしています。

悪人正機 — 慈悲のはたらき

今回は、「悪人が目当てなら……」という講題を付けさせてもらいました。浄土真宗の宗祖である親鸞聖人の思想の中で、代表的なものに「悪人正機」という教えがあります。龍谷大学の学生の皆さんには、必修科目の「仏教の思想」で習ったと思いますし、真宗学科の学生さんであれば、必ずどこかで聞いたことがあるでしょう。悪人正機とは、「阿弥陀如来という仏さまは悪人を正しき目当てとする」という意味です。「正しき」とは「確かな」という意味。つまり親鸞聖人は、阿弥陀如来は悪人を確かな目当てとして動いていかれる仏さまなんだよと説いていました。実は、このことは親鸞聖人のお師匠さまである法然聖人もおっしゃつておられたことでした。

しかしながらこの悪人正機という表現はおもしろい言い方ですね。「善人」ではなく「悪人」が目当てだというのは、いったいどういうことなのでしょうかね。これについては先に答えを言ってしまいますけれども、「悪人正機」という言葉は、仏さまの「慈悲のはたらき」を表している言葉なのです。

皆さんも、「慈悲」という言葉は聞いたことがあるでしょう。私もつい先日、「仏教の思想」の講義で「慈悲ってどういうイメージの言葉ですか」と学生さんに聞きました、「なんか、こう、優しいみたいな感じっすか?」って答えてくれました(笑)。そうです、優しいんです。しかし、優しいだけじゃなく、「慈悲」にはいろんな側面があるんです。

七子のたとえ

悪人正機について、見事に表現しているたとえ話が『涅槃經』というお経の中に説かれています。この『涅槃經』は、親鸞聖人も非常に大事にされたお経です。この中に、「七子のたとえ」という有名なたとえ話が出てきます。もちろん親鸞聖人も『教行信証』の中に引用されています。ど

ういうお話かというと、もし子どもが七人いたとしましょう、というところから始まります。その親の思いは、当然、七人のどの子にも平等に向いています。どの子もそれぞれ個性があつて、それぞれにかわいい、大切な存在です。ところが、その七人の中に、もし一人だけ病気の重い子が出てきたらどうなるのか、と『涅槃經』は展開します。

たとえば具体的にイメージするために、こんな状況だったとしましょう。さつきまで元気に二コニコ笑っていた子が、あるいはふざけて踊り歌つていた子が、または大声をあげて走り回つていた子が、ふと気づくと、どうも様子がおかしい。そうなつた時、親の心はざわつき始めます。子どもに訊ねてみると、表情を曇らせて「頭が痛い」と言いだした。見ると顔色も悪い。親は、「あんたどうしたん?」と言つて、その子のおでこに手を当ててみると、ずいぶんと熱い。すると、その子が「気持ち悪い……」と言つてゲボゲボと吐き出し、「うえーん」と泣き出したとする。もうこうなつた時は、親は他の元気な六人の子たちに対しては、「ちょっと、あんたたち、あつちに行つといて」となりますよね。そこから先、親は体調を崩したその子のことしか見ていないでしよう。「なぜ、こうなつたんだろうか?」「この子は、今どんなに苦しいんだろうか?」「家にいい薬はなかつたか?」「病院に行くならどこの病院がいいんだろうか?」と。親はこの子の苦

しみ、痛みを理解して、なんとかしてこの苦しみを取り除いてあげたい。せめて少しでも和らげてあげたい。その一心で動き続けます。それが、親です。

ここで間違つてはならないのは、親は他の元気な六人の子たちが可愛くないというわけじゃありませんからね。体調を崩したその子が、心配でたまらないということを言つているんです。この『涅槃経』には、

この七子のなかに一子病に遇へば、父母の心平等ならざるにあらざれども、しかるに病子において心すなはちひとへに重きがごとし。

（『顕淨土真実教行証文類』／『淨土真宗聖典—註釈版—』二七九頁）

この七人の子の中で、もし一人が病気になれば、親の心は平等でないわけはありませんが、その病気の子にとくに心をかけるようなものであります。

と出できます。ここに出てくる「病子」は、どういう人のことを喻えているのかと、きちつ

と世間のルールを守り、怒りに流されず、他人のことを思いやつて生きることが素晴らしいことだと知つてはいるけれど、どうしても自分中心にしか生きることができなくて、時にルールを破り、人を傷つけて、自分も傷つけられて、何度も反省はするけど、また同じ過ちを繰り返しながら生きていく者のことです。これは仏にとつて善人ではなく、悪人と言われる存在です。そういうどうしようもない自分に時に落胆し、自分を責め続けて生きる存在。そういう者に対して、仏さまの思いは一点集中していくんだということです。これが「悪人を正しき目當て（機）」として動いていくという、仏さまの慈悲の側面なんです。

一九九五年の出来事

ここまで理解してもらったところで、ちょっと話を動かします。私は、この龍谷大学の出身です。入学したのが一九九五年の四月一日のことでした。今年でちょうど三十年目です。

私が入学する直前、日本では歴史に残る大変な災害がありました。一九九五年一月十七日午前五時四十六分。震度七を記録した「阪神淡路大震災」という、とんでもない大地震が起こりました

た。この地震は、縦揺れしてから横揺れしたと言われています。高速道路が倒れている映像を思
い出す人もいるかも知れません。家は壊れ、ビルはかたむき、多くの方々が亡くなられました。
日本中がこの災害に注視して心を共にしましたし、特に被災地の方々は、本当に大変な時間を過
ごされたのでした。

そしてこの一九九五年は、私が入学する四月一日までに、もう一つの大きな事件があつたん
です。覚えておられますか。そうです。三月二十日、地下鉄サリン事件です。今の学生さんたちは
この時間を過ごしていませんから、ピンと来ない人が多いでしよう。東京の地下鉄の中で、サリン
という猛毒のガスを撒いた人たちがいたんです。オウム真理教という団体がおこなった事件で、
人類史上初の毒ガステロ事件と言われています。六千人以上が負傷し、十数名が亡くなつた大変
な事件でした。

阪神淡路大震災があつて、そしてこの地下鉄サリン事件があつて、私はその年の四月一日に、
福岡の田舎から龍谷大学にやつてきたわけです。入学したわけですけども、もう本当に、日本中
がバタバタバタバタしていました。まだ京都では余震が続いていましたし、テレビではどの局で
も連日オウム関係の特番が流れっていました。

悪人「こそ」救われる——浅井成海先生の思い出

私が入学した時の「真宗学基礎演習I」という講義のクラス担任は浅井成海先生でした。こうしてスライドの画像でお顔を拝見いたしますと、一見ちょっと気難しそうな雰囲気を感じる方もいるかもしれません、優しくて、言葉も穏やかで、また誠実で、もちろん学問にも一生懸命取り組まれた素晴らしい先生でした。私たちの頃の真宗学科は、今と違つて、お寺の子がほとんどでした。でも、お寺の子といっても、浄土真宗の教えを喜び、浄土を受け入れ、お念佛を大事にして生きてきた子が、その中にどれくらいいたのかといえば、正直言つて、そんな子はほとんど居なかつたでしよう（笑）。基本的にはその寺っ子の八割くらいは「お寺を継ぎたくない」と言い続けて抵抗し、親とぶつかりながら、それでも家族やご門徒さんの圧力に寄り切られて入学してきたような子たちが多かったと思います。今会えばね、本当に驚くほど、立派な僧侶になつておられます。当時の私の周りは、私も含めてそんな学生ばかりだった気がします。

ところで、当時の真宗学科に入った新入生たちは、わりと早い段階で「悪人正機」について習つたと思います。そんな子たちが「悪人正機」について学ぶと、「悪人が目当てらしいで」と、

ここだけ面白がって聞くわけです。

「悪人が目当てなん？　じゃあ、どんなんでもいけんの？」

「悪人が目当てと言つてるんだから、そりや、どんなんでもいいんじやない？」

と、こういう聞き方をするわけです。そして当時の大学一年生の私たちがすぐに思いつく「悪人」とは、地下鉄サリン事件を首謀した麻原彰晃でした。ですから、

「だったら、麻原彰晃でもいけるんか？」

「そりやあ……。いけるんじやない？」

「じゃあ、浄土にいつたら、あの人いるわけ？」

「まあ……。そりやない？」

「え！ 何を話したらええん？（笑）」

「知らんがな（笑）」

みたいな感じです。悪人正機を習つたばかりの私たちは、ある時、浅井先生の真宗学基礎演習が

始まる前、こんな話題でけつこう盛り上がったことがあったのでした。

そしたらチャイムが鳴りまして、浅井先生が、「おはようございます」と、教室に入つて来られました。先生が、いつものように出席を取り終えますと、「じゃあ今日の発表は、誰やつたかな?」と先生が訊ねますと、後ろから、「先生!ちょっと質問していいですか?」と声があがりました。さつきまで「どんなんでもええんか?」「麻原でも救われるんか?」と一番盛り上がつていた同級生でした。

浅井先生が「うん? はい、どうしたかな?」と言いましたら、同級生が、「先生、この前、悪人正機って習つたじゃないですか。あれ、悪人が目当てって言つてているんですよね?」と言いました。先生が真剣な目で「ああ、はいはい」と答えますと、その学生は先ほどの話題のまま、ストレートに

「それやつたら、麻原でもいけるんすか?」

と訊いたのです。私は彼のそのぎつくばらんな聞き方に、何となく「あ、これは怒られる?」と

思っていたんですが、浅井先生は、「麻原さんって、あのオウム真理教の?」と確認された後、少し微笑まれ「ああ、いい質問やねえ」と言われたのです。私は意外でした。「えつ、これいい質問なんだ?」と思いましてね。質問した本人の方を見たら、「見たか、お前ら」みたいな自慢気な顔、いわゆるどや顔をしているのです(笑)。すると浅井先生は、続けて真剣な表情でこうおっしゃったのでした。

「悪人が目当てつて聞いた時にね、『だったらあの人でもいけるんかな』『この人でもいけるんかなあ』って思いますねえ。でもね、『あの人でもいけるんか』『麻原さんでもいけるんか』って言つているうちはね、親鸞聖人が説いていかれた悪人正機とは、あんまり関係がないんです」

と、ぴしやりとおっしゃいました。クラスの全員が真剣に聞いていました。浅井先生は、続けて、

「真宗学科に入学してきた皆さん方が、これから四年間、浄土真宗のお勉強をしていくわけで、その中で、親鸞聖人というお方は、どういう教えを説いていかれたのかな、阿弥陀如来

をどういう風に受けとめていかれたのかなと、じっくりじっくりと学んで聞いていきます。その中で、この悪人正機という教えは、はじめて輝き始めると思います。「あの人はどうかな?」「この人はどうかな?」と言っているうちはね、あんまり親鸞聖人の浄土真宗とは関係がありません。そしてあの、質問したあなたね。さつき『麻原さんでもいいんですか』と言ったかな?」

「はい」

「悪人正機というのはね、『悪人でも』じゃなくて『悪人こそ』やからね。そこも大切な所やな。はい、そうしたら、今日の発表いきましょうか」

と、授業に入つていかれました。

当時、私は教学的には何にも知りませんでしたけど、浅井先生のこのお答えに、「おお! なんかすごい……」と思いました。たいへん印象的でした。何となく圧倒されたというか。そして三十年の月日が流れましたが、今は、その時に先生がおっしゃりたかったことは、とてもよく分かりますね。

人間の九品くほん

さて、ちょっとお訊きしますが、皆さまは、ご自分のことを「善人」だと思われていますか？それとも、「悪人」だと思われていますか？

こうやって聞きますとね、皆さまがたは慣れていらっしゃるでしょうし、なんとなく話しの流れ上、「ああ、この人は『悪人です』って言わしたいんだろうな……」と思うでしょ。分かりますよ（笑）。真宗にありがちな答えの透けている感じ。ということで、ちょっと聞き方を変えましょう。親鸞聖人が浄土真宗で大切にすべきだとされた三つのお経があります。浄土三部經といいますが、そのうちの一つに『仏説觀無量寿經』というお経があります。

このお経は、途中、人間の資質を九種類に分類して、それぞれに応じた難易度の行を与えていくという興味深い一段があります。一番上が「上品」。これ普通は「じょうひん」と読みますが、仏教だと「じょうぽん」と読みます。「品」は品分けすること、つまり区別することです。そして真ん中が「中品」、下が「下品」と大きく三つに分かれます。さらにそこから、上品の中で、上・中・下と分け、中品も上・中・下、下品も上・中・下とそれぞれ三つに分かれますから、全部で

九通りに分かれています。つまり上の上から下の下に分かれていて、上から下に向かって行の難易度も下がっていくのです。

さて、こうやつて分けられた時、皆さん方、ご自分はどのくらいに居ると思われますか？ 正直に。

浄土真宗の教えに慣れている人は、こう聞かれると「下の下って言わしたいんやろうな」と思うでしょ？ でも、みなさん、本当に自分のことを下の下だと思っていますか？ 本当は全然思つてないでしょ。私は今、皆さま方が九種類の中でだいたい自分をどこに置いているかわかりますよ。言いましょうか？ 多分ね、「中の上」か「上の下」くらいだと思つてているでしょ。ほとんどの方はおそらくそう思つて普段生きているのではないでしょ？ 何を隠そう、私自身、「中の上くらい」はあるのではないかと思つていますからね（笑）。しかしね、これ、本当にそうだろうか、と仏教は改めて問い合わせてくるわけですね。

仏さまの価値観・罪の枠組みを知る

龍谷大学には、「存じの通り「仏教の思想」という授業があります。「建学の精神」を伝えるための大切な必修授業ですし、その意味では、わが校の名物授業とも言えるかもしれませんね。この授業で仏教の教えに触れていく時、私たちは仏さまの価値観を知ることになってしまいます。

「仏さまからしたら、この世界はどう見えているんだろうか」「こんな時、仏さまならどうお考えになるのだろうか」。そうやって仏さまの価値観を知っていくと、「仏さまは何を罪と考えているのか」という、いわば「罪の枠組み」を、また知っていくことになります。そして、たとえば五逆罪や誇法罪といった罪の枠組みを知らされた時、私たちは自動的に、自分のこれまでの人生をきっと振り返るのです。自分はどうだつただろうかと。そうやって振り返った時、かならず誰もが多くの罪を犯してきた自分に出合い、その自分と多少なりとも向き合うことになってしまいます。

仏教では「おこない」ということを考える時、身でやること（身業）、口で言うこと（口業）、心で思うこと（意業）、この身口意の三業すべてを「おこない」として見ていきます。普通は、「お

「こない」といえば身と口だけですね。でも仏教では「心で思うこと」も含めて見ていかないとその人の「おこない」を真に見たことにはならないと考えるのです。言われてみればその通りかもしれません。面従腹背、言葉と思いは裏腹などと言いますからね。そうなつてくると、「私はこれまでそんなに罪を犯したことがない善人だ」と言える人は、ほんのりくなつてくるんですね。

大きい石、小さい石

ところで今日、ここにおいでの方々は、私の話を聞こうと思って、ここに今座つておられるわけですね。しかしながら、私が、普段やつております「仏教の思想」という授業は、学生の皆さん方が仏教の授業を聞きたくてそこに座つているのかと言えば、必ずしもそういうわけではないようです（笑）。ではなぜ座つているのかと言つと、大学側が必修の授業だと言うから。つまり「この授業の単位を取らないと卒業させないぞ」と言つてゐるから、まずは座つてゐるわけですね。でも、はじめはそうであつても、学生さんたちとこの授業で一年間お付き合いさせてもら

う内に、段々と仏教の話を興味深く聞くようになつていきます。これは本当の話です。

その中で、私が講義をする際に気をつけている事があります。それは、学生さんに話す時は、どれほどシンプルな論理にして分かりやすく話をしたつもりでも、それだけではウトウトさせ、中にはスヤスヤと寝させてしまうということです（笑）。その時に大事なのが、適切な身近な例話とか、たとえ話をいかに用いるかということです。学生さんたちには、どうも仏教は、どこか自分から遠い話をしているんだという先入観があるようで、こうした例話があつてはじめて伝えようとしていた話が学生さんたちの身の上にストンと落ちてくるのです。これはお寺に招かれてご法話するときも同じですね。これがない仏教の話は、私が聞いていたって、はつきりいって退屈です（笑）。

さて、この罪の話しをする際に私がしばしば用いているのが「大きい石、小さい石」というお話を。この「大きい石、小さい石」というお話は、お釈迦さまのお話です。お釈迦さまは悟つて以降、涅槃に入られるその日まで、生涯（雨期を除いて）歩き続け、毎朝お説法をされてました。近隣にいるお弟子さん、在家の信者さん、あるいは通りがかつただけの人とか、そういうった人々

がそこに座って、お釈迦さまのお話を、「へえ」と聞くわけです。ある時、お釈迦さまのお話にものすごく感銘を受けた人がいました。そして、お話を終わった後、その人はお釈迦さまの前に進み出て「私を出家の弟子にしてください」と願い出ました。すると、お釈迦さまが志の素晴らしいさを褒めつつも、出家の厳しさを説いて聞かせます。しかし、その人の決意は固いので、お釈迦さまが、これまでの人生で、どんな思いを抱いて歩んできたのか、またなにか後悔を抱えているのかと訊ねると、その人は意外にも、特に取り立てて言うような罪を犯したわけではない。普通に生きてきたというのです。

そこから彼の修行が始まりました。朝、そのお弟子さんがやつてくると、お釈迦さまは最初の行として「あそこを、見てごらん」と指さしました。そして「あそこに大きい石がたくさん転がっているのが見えますか?」と言います。修行者が頷くと、お釈迦さまは「あれを、何日かかってもいいからここに運んできて積み上げてくれますか」と言われたのでした。それがそのお弟子さんの最初の行でした。お弟子さんがそこに行つてみると、いくつかゴロゴロと大きな石が落ちてるので、それを抱えて「よいしょ!よいしょ!」と運んで、戻ってきてはドシンと置く。何

度も何度も運んで、大きな石の山ができていきます。運び終わつたので、「お釈迦さま、終わりました」と報告に行くと、「ああ、すごく積み上がつたね」と言うや、次の行を説かれ始めました。「今度はあつちを見てごらん。あそこに、小さな石がたくさん落ちていますね。」と言われます。そのお弟子さんが頷くと、「何日かかつてもいいから、あれを今度はここに積み上げてくれますか?」とお釈迦さまはいわれました。今度は、お弟子さんはそこへ行つて、小さい石をジャラジャラと集めては、運んで来てザーッとこぼします。何度も何度も往復する内に、大きな石の山を超えるほどの小さい石の、大きな山ができ上りました。ついに作業を終え、「終わりました」と報告に行くと、お釈迦さまが次の行を伝えられたのです。

「次はね、先日のこの大きい石でできた山、この前積み上げてくれたこの大きな石を、元に戻してくれますか」と。お弟子さんは、戸惑いながらも言われた行を始めます。大きい石はそもそも、小さい石に比べて個数が少ないです。そして、どこにあったか、だいたい何となく覚えているんですね。「これ……、確か最後らへんにあの辺から運んで来たような……」と思って行つてみると、大きい石は元に戻せるのです。なぜなら、その石があつた場所には、地面に穴が開いているからです。だから「ああ、ここだ」とポコッとはめられる。このお弟子さんはこれを何度も

か繰り返していくうちに、「分かった！」と。——彼は一つ悟ったんですね。

彼はお釈迦さまのところに戻ってきて、「お釈迦さま、この修行の意味が分かりました」と言いました。お釈迦さまは聞いておられます。このお弟子さんは続けます。「これは、私が入門する時に『罪を犯さずに生きてきた』と言った、あの言葉に対して与えられた修行でしたね」と。彼は続けます。「今、私は大きい石をずっと戻していました。大きい石はなんとか元に戻せます。しかしこの行を終えたと報告に行けば、お釈迦さまはきっと『今度は小さい石を元に戻せ』とおつしやるに違いない。しかし、私は小さい石は元に戻せません。なぜかとすると、小さい石が元々どこにあつたのか、私はいちいち覚えていないからです。また地面に跡もついていません。戻すことは不可能です。私はあの時に『罪を犯していない』と言いましたが、それはあたかも地面に跡を残している大きな石のように、記憶に残っているような大きい罪は犯していないつもりでも、この小さい石のような、地面に跡が残っていないような罪は、大きな石の山を凌駕するほどに積み上がったあの小石の山のように、たくさん犯してきたはずだ。そうおっしゃりたかったんじやないでしようか。」

これを聞いて、お釈迦さまは初めて微笑まれ、ここから「人間というのはね……」と説法がは

じまつていくわけです。私たちは自分のことを「中の上ぐらいはある」と思つてゐるわけですが、本当にそうだろうか。罪を犯してきた者が、それを忘れてゐるだけじゃないのか、という話です。

ハガキでごめんなさいコンクール

私はこの話をした時、授業でもう一つ、話を重ねます。皆さん、アンパンマンの作者のやなせたかし先生、ご存知でしようか。今NHKの朝の連続テレビドラマで『あんぱん』をやつていますね。やなせ先生の出身地は高知県の南国市です。その南国市が、かつて先生をお招きしてイベントを開催したそうです。ところが先生が地元に帰つてみると、過疎が進み、先生はビックリされだと。それで、南国市のメンバーと町おこしをしようという話になつたそうです。

みんなで頭をひねつて、やなせ先生がふと「南国市には面白い場所があるじゃないか」と言われたそうです。それはどこかというと、南国市には「後免町」っていう町があるので、バスが到着する時も、車掌さんが「次は、ごめん、ごめん」と言うんだそうで、何か謝つて、いるみたいで、地元の者でもちよつとおかしい。やなせ先生がおつしやつたそうです。人は、自

分で「罪を犯してしまった」「傷つけてしまった」と思つていても、相手の人に「ごめんなさい」が言えていないことつて結構あると。そして、それが後悔になつて積み重なつてゆくんだと。やなせ先生は後免町という町名にちなんで、みんなの「ごめんなさい」を、募集してみたらどうかな。ハガキにイラストでも書いてもらつて、ごめんなさいのエピソードを募集したら楽しいんじやないか、と提案されたのでした。

そこで、地元出身のやなせ先生の肝いり企画で、「ハガキでごめんなさい全国コンクール」というのが立ち上りました。やなせ先生は、「せっかく立ち上げたのに、締め切りの日に全然集まつてなかつたら恥ずかしいな……」とドキドキして待つていたそうなんですが。蓋を開けて見れば二六〇〇～二七〇〇通ものハガキが届いていました。全国津々浦々から、老若男女を問わず、山のようにハガキが届いていたのです。

この企画が何年か続いた後、印象的な「ごめんなさい」が集められて出版されました。その本を拝見していますとね、イラストと共に「ああ、これは面白いな」と思うのがたくさん出てきます。また不思議なのはね、読み進める内に色々と自分の心の中に思い当たる節あしがあつて、その記

憶が浮かび上がつてくるのです。私はこれをいくつか持つていって、「仏教の思想」で紹介するわけですが、今日もその中からいくつか持つてきました。

たとえばこれは、お孫さんからおじいちゃんへの「ごめんなさい」です。

おじいちゃんへ。お年玉をもらつたときに、「たつたの千円かよ」と言つて「ごめんなさい」。

他の人が高いお金だつたから、つい言つてしまつました。ごめんなさい。おじいちゃんの大
切な千円に、もう文句は言ひません。二度とこんなことはしません。

と。これは、たぶんこの子が、あとで親にめちゃくちゃ怒られたんだと思ひます。ものすごく反省してますから（笑）。次は、母から息子に対してですね。

長男が小学校の修学旅行の時、持ち物に名前を記入せよとのこと。長男に書かせればよかつたのに、私はすべてに息子の名前を記入した。「もう名前、書いちゅうきね」。息子は点検のため、学校に荷物を持参。ところが帰つてくるなり息子の一言。「お母さん、名前違うちゅ

うが！」と。見てびっくり。私は息子の名前ではなく、なんと自分の名前を書いてしまいました。

その時はつい笑ってごまかしたけど、あんた、なんばか恥ずかしかったろうね。あの時はごめんなさい。

これも笑えます（笑）。このお母さん、相当疲れていたのでしょうか……。

続けます。次は娘から父親に対してです。これは父親のかなしみと言いますか、個人的に、私はこれ大変よく分かるんですが。

高校入試の合格発表の日。私は受かったことを知らせに家に飛んで帰った。父が庭に出て植木の手入れをしていた。私はその父の横を無言で素通りして、家に駆け込んで、母に報告した。父には何も告げず、母と抱き合って「やった、やった」と飛び跳ねた。心配して、庭に出て私を待っていた父に、なんであの時、まず一言「お父さん、受かったよ」と言わなかつたんだろう。今でも申し訳なく思っています。お父さん、ごめんなさい。

これ、うちの家もほぼ同じです。子どもたちはなんがあると、すぐ「お母さん、お母さん」と探して、なんやかんやと言っています。でも、時どきね「お父さん」とやってくるのです。私が「どうした?」と張り切って訊ねますと、「お母さんは?」って訊いてきます(笑)。私に用事はないんです。

次は、お母さんから息子さんにです。

小学4年生の息子の宿題を見ている時、「あんたなんでこんな簡単な計算できないの? もう勉強なんかせんでええわ!」そう怒鳴りつけて、台所に引っ込んでしまった私。しばらくして戻ると、息子は泣きながら教科書をノートに写していた。その姿に胸が痛んだ。「カエルの子はカエル、トンビが鷹をうむわけないよね」。そして、私に気がつくと涙をいっぱい浮かべた目で、「ママ、ごめんなさい」と一言。ママの方がごめんなさいでした。

これもよくわかります。よその子にはわりと我慢がきくのに、自分の子に対する厳しくなるんですよね。自分の「昔」は、棚に上げてね。

次は、少年野球の審判（アンパイア）をしてるお父さんから息子さんへ向けてです。

外角いっぱいのストライクと、ギリギリのボール。そこに一体どれほどの違いがあるか、わかるか？ その差なんて、紙一枚ほどもないんだよ。しいて言えば、君がピッチャーで投げた球なら「ボール」さ。君がバッターだったら「ストライク」になっちゃうのさ。

小学校最後の試合、最後の打席。君は見逃し三振だったね。

「えっ？」

という顔で振り返った、あの悲しそうな目を、父さんは今でも忘れることができない。アンパイアなんかになってしまった父さんを、許しておくれ。本当にごめん。

わが子には、こういうとき、他の子より厳しくなってしまふんですよね。
さて、ちょっとここからシリアルになります。

「残業で遅くなつてごめんね。スーパーででき合いのもの買つてきたから、ちょっと待つて

てね」

そう言つて妻は食材と一緒に、ケーキをテーブルに置いた。

「なんだよ、このケーキ」

少しイラつきながら尋ねた僕に、

「今日は結婚記念日だよ、三十一回目の」と妻は笑つて言つた。……自分は、すっかり忘れていた。

一年近く、精神的なストレスで仕事を休職している僕に、妻は嫌な顔ひとつせず、いつも通り普通に接してくれている。妻の背中に向かって呟いた。

「ごめんな。来年は一緒に旅行でも行こうな」

次は、受験の話です。

さやちゃん、ごめんなさい。

お母さん、この一言が言えずにもう十二年が過ぎてしましました。中学校受験の合格発表の

あの日、あなたは残念ながら不合格でしたね。

最寄りの駅までの道すがら、ニコニコと歩くあなたの不自然さに、私は強い口調で「あんたなんで笑うん?」あなたは答えませんでした。

ごめんなさい、お母さん、本当は分かつていました。さやちゃん、他の受験生に合格者に見られたかったんだよね。本当はさやちゃんが一番泣きたかったよね。寒い寒い二月の夕暮れ、お母さん忘れません。本当にごめんなさい。

次で最後にします。

父が入院して、母が土木仕事で生活を支えてくれていた時、私は中学生でした。ある日、母が「工事終了祝いのお土産よ」と言って、食べ残りの寿司を持ち帰つてきて、私の前に置いた。

中学生で生意気盛りだった私は、

「なあ、人の食べ残しを、俺に食わすんか?」と声を荒げて寿司を畳の上にぶちまけた。

「……」めんね」。

母は私に謝り、寂しそうに後片付けをした。

母さん、謝らなければならないのは私の方です。

母さんの苦労が、身に染みる年になりました。

母さん、あの時は本当にごめんなさい。

これらの話、私にも心当たりがあります。いま紹介したような「ごめんなさい」が、生きていれば積み重なっていきますね。これを授業で紹介したら、学生たちはかなり真剣に聞いてくれています。というよりも、泣きそうになってる学生もいるほどです。

授業の後、毎回、学生さんにコメントシートを書かせていますけど、その日、私は何も言つてないんだけども、学生さんの方が、自分で「私のごめんなさい」を書いてきます。たとえば「今日、家の出掛けに母親にひどいこと言つて出でてきます。このことをこの授業で気づかされました、今からLINEで謝ります」とかね。「この授業でハツとしました。誰々に今度ぜつたい謝ります」といった感想が具体例と共にたくさん出てくるのです。

悪人正機の阿弥陀さま

悪人正機の話に戻ります。仏さまの物の見方、価値観、考え方の枠組みに触れた時、人はからずこれまでを振り返ります。そして罪を犯していいた自分に気づきます。つまり私たちというのは、罪を犯しても気づいてなかつただけではないのでしょうか。あるいは「大きい石と小さい石」の話からするなら、私たちは罪を犯しても忘れていただけだつたのではないのかということがありますね。さらには、もう一つありますね。私たちは罪を犯した自覚もあるし、明確にその時のこととも覚えてもらっているけれど、相手との関係の中で「なかつたことにしてもらっている」というのもあります。今述べたような人のことを、「罪を犯していない人」、まして「善人」とは言いませんし、「中の上」の人とも言いません。

私たちは時々、ある日の後悔が胸の中で大きくなつていって、夜、眠りにくくなるような日があります。「何である時、あんなことをしてしまつたんだろう……」、「なんで、あんなことを口走つてしまつたのだろう……」、「あんなこと、思うべきですらなかつた……」と。本当にタイムマシー

ンがあるなら、そのバカなことをしようとしている自分を止めたい。やり直せるのならやり直したいと思うほどの時があります。でもそんなことできるわけもなく。そんな時に、真っ先に私のところに立ち上がりつてやつてきて、「大丈夫だよ」と告げてくださる仏さまがおられる。それを悪人正機の阿弥陀如来さまというのです。私たちは、つまずきを繰り返し、後悔を積み重ねながら生きています。だからこそ、この悪人正機の仏さまが、温かく感じられるわけです。今日のお逮夜法要のご縁は、悪人正機についてお話をさせていただきました。私の話は、ここまでとさせていただきたいたいと思います。皆さま、ありがとうございました。

【文責宗教部】

(一〇二五年五月十六日 ご命日法要 大宮学舎)

世界に響きわたる「他力の信心」

葛野 洋明

(本学実践真宗学研究科 教授)



葛野 洋明 (かどの ひろあき)

1962年、大阪府出身。

龍谷大学文学部仏教学科真宗学専攻卒業。

米国仏教団(本願寺派北米開教区)開教使としてロスアンゼルス別院に赴任。その後、浄土真宗本願寺派教学研究所(現総合研究所)研究員に着任。

現在、実践真宗学研究科教授。

【著作】

「『歎異抄』の教学史的研究」(共著、龍谷大学仏教文化研究所／2007年)

『親鸞』(共著、真宗教団連合／2009年)

「主体的実践分析研究方法」の研究」(『真宗学』133号／2016年)

「国際伝道論研究の意義」(『真宗学』137、138号／2017年)

「異言語間伝道の研究」(『真宗学』141、142号／2019年)

「伝道の実践的側面に関する研究」(『龍谷大學論集』498号／2022年)

ほか多数。

講題

信心すなはち一心なり 一心すなはち金剛心

金剛心は菩提心 この心すなはち他力なり

(『高僧和讃』、『淨土真宗聖典—註釈版—』五八一頁)

「信心一つのお救い」

親鸞聖人がご生涯をかけて顯かにしてくださったのは、何と言いましても、阿弥陀さまのお救いがありました。そのお救いを、親鸞聖人は「信心一つのお救いである」とおよろこびになって、顯かに示してくださいました。

親鸞聖人が顯かにされた阿弥陀さまのお救いは、「ありとあらゆる命を、必ずお淨土に生まれさせ、この上ない悟りを開かせて、仏にさせよう」という、そんな願い・誓いであったわけです。その願い・誓いが見事に成就されて、今、私に至り届いてくださっている。それを私どもはた

だ聞き受けさせていただいて、よろこばせていただく。それがまさに、「ご信心一つの救い」であると親鸞さまは仰つたわけです。

この「ご信心」という言葉は、とても読みやすく分かりやすい言葉です。それでかえって分かっただような気になってしまって、後から「ああ、えらい思い違いをしていたな……」と気付くことがあります。その思い違いの一つが、「他力の信心」ということについての思い違いです。この「他力の信心」が、親鸞さまが顕かにしてくださいましたお救いの一番の特徴であると言つていいわけです。

「ご信心一つの救い」というのは、浄土真宗のご縁に遇つた方にとって、「ああ、ご信心こそが一番大事だよね」と言つてくださいますよな、一番肝心の言葉です。これは、私が個人的に「一番大事ですよ」と言つてるのはなく、親鸞聖人はもちろん、親鸞聖人より二百年ぐらい後の蓮如上人というお方も仰つておられます。この蓮如さまのお手紙、『御文章』「聖人一流章」といいますが、こちらには、「聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候ふ」（『御文章』／『淨土真宗聖典—註釈版—』一二九六頁）とあります。ここで蓮如さまが「聖人」とお呼びになる

のは親鸞さまのことです。つまり、親鸞聖人がお勧めくださったこの阿弥陀さまのお救い、それは何と言つても「信心をもつて本とせられ候」と言い切つてくださっています。こういう言葉を私たちは五百年聞いてきたわけです。いや、親鸞聖人の時代からと考えますともつと前からですね。ずっと、私たちはこの「ご信心一つ」ということを大事にしてきたわけです。

一心・金剛心・菩提心

その「信心」ということを親鸞さまはどのように仰つてているのでしょうか。今日の最初にご讃題として拝読いたしましたご和讃の中に、「信心」のことをきちっとお示しくださっています。

信心すなはち一心なり 一心すなはち金剛心

金剛心は菩提心 この心すなはち他力なり

(『高僧和讃』、『淨土真宗聖典註釈版』 五八一頁)

この「一心」とか「金剛心」とか「菩提心」という言葉は、実は大変深い意味を持つています。今日は簡単に、言葉の意味だけ取っておきます。まず、「一心」というのは、「疑いなく」ということです。私の言葉で言うなら、「必ず」ということなのかなと思っています。「金剛」は、壊れない心のことです。そして、「菩提心」は、「菩提」というのは悟りですから、「悟りを求める心」です。

私たちの心

では、私たちの心で、疑いのない「必ず」という心を作れるのでしょうか。これは厳しいですね。今はそう思っていても、次の瞬間にはコロっと変わってしまうのが私たちの心じやありませんか。私は友人から、「心ってなんでココロって言うか知ってるか?」と聞かれたことがあります。「なんで?」と尋ねたら、「コロコロ、コロコロと、動いて行くからココロって言うんや」と言つていきました。心の正式な語源はまだ調べていませんから、これが本当かどうかはわかりません。でもなんとなく、私たちの心のことを言い当てるような気がしますね。

そんな、コロコロと移り変わる心で、「一心＝必ず」と言つてみても、次の瞬間にはコロつと
変わつていく。そんな私たちの心で「一心」なんていう心を作り上げることは不可能です。

次の二つもそうです。「金剛心」は壊れない心。私は「心が壊れる」という表現はあまり好きじゃないんですけど——、私たちは忘れていくし、心変わりする。どんどん移り変わっていくのが私たちの心ということは言えますよね。それなのに、「金剛の、もう変わらない心を作りなさい」と言われたら、もう「無理無理！」と言うしかない。

そして、最後の「菩提心」ですが、これは強烈ですね。「菩提を求める心」です。皆さんどうですか？　自分のこの心の中に「悟りを求める」「もう私は迷いの命から悟りを開く命になろう」そんな素晴らしい心がありますか？　私には、そんな心はありません。

そんな私たちに、阿弥陀さまが、「一つの心、金剛心、菩提心という心を起こしなさい」と言われるなら、私はもう「無理です」と言うしかないじゃないですか。

「この心すなはち他力なり

でも、心配はいりません。阿弥陀さまはそんな私を良くご存知ですかね。

「あなたに、必ずという『一心』、壊れない『金剛心』、悟りを求める『菩提心』を作れと言つたところで、無理なことはわかつてゐる。だけどこれは、悟りを開くためには絶対必要な心なんだ。だから、私は、如來の『一心』、如來の『金剛心』、そして、あなたに悟り開かせるという如來の『菩提心』、この如來の『一心・金剛・菩提心』をあなたに与えて、救いましょう」

そう仰つてくださったのが、阿弥陀さまです。

ですから、親鸞さまは、このご和讃の最後に「この心すなはち他力なり」と仰つてくださいました。

分かりがたい救い

私も、他力のお救いということについては、頭では理解したつもりです。しかし、それが「うわあ、本当に他力の救いだったな！」って、心の底から、腹の底から、理解できた。分かつたと

いえるかというと、難しいことです。

これはしようがないことなんです。「他力の救い」って、私たちが見出した救いじゃありませんからね。私たちが考え出したのではありません。これは、お悟りを開かれた仏さまの救いですから、悟りを開いたことがない私どもにはどうしても分かりがたいものがあります。もう少し丁寧に言いますと、私の方から理解することはできないような、信じることなどできないようなお救いです。

海外のお同行

他力の信心による救いは世界中に響き渡つております。世界各地に仏さまをよろこぶ、他力の信心をよろこぶお同行の方がたくさんいらっしゃいます。

そのようなお同行に実際に会わせていただきますと、言葉とか写真とか映像だけじゃなくて、共感できると言いましょうか、心が一緒になるような、そんな思いをさせてもらうことがあります。特に生のお声ですね——、もちろん海外の方ですから、日本語ではありませんし、私は片言で

すから、少ししか聞き取れません。それでも生の声を通して、阿弥陀さまのお救いって世界中に響き渡っているんだなと思えます。また、それは同時に、ここにお参りさせていただいています私も一人ひとりにも今、ちゃんと響き伝わっているということです。

海外のお同行、御法義をよろこぶお方にお会いしたり、その方のお声を聞いたりすると、「ああ、そうや、そうや、そうやった」と、思わず共感すると言いましょうか、心が潤うと言うんでしょうか。心が一つに成るわけではないけれど、「そうそう！」と思える時があります。実は、少し前にもそういうことがありました。今日は、それをお話しようと出てきたわけです。

去年の九月、「真宗伝道学特殊研究（北米研修）」という大学院の講義がありました。私は引率の係をさせていただきまして、二十二名の院生さんとご一緒にしました。十二日間で十一ヶ寺のお寺、七ヶ所の様々な博物館等に行かせていただきました。さらに、十八以上の講義を受けまして、今、報告書を作成しています。その研修でお会いした方のお話です。

その方は、ビクターさんという人で、私たちが行った九月の一ヶ月前、八月に真宗のお坊さんになつたばかりの方でした。アメリカ生まれアメリカ育ちで、日本の文化とはほぼ接点がなかつたようなお方です。

その方に、レクチャーをお願いしました。そして、休憩の時とかに、私は片言の英語でビクターさんにいろいろと尋ねました。聞きたいことは一杯ありますからね。

「ビクターさんはどういう経緯でお坊さんになつたんですか?」

「私はジョージア州の生まれで、ジョージア州って言われてもわからないでしょ? アトランタという町はご存知ですか?」

「あ、それなら知つてます。オリンピックやつた町ですよね?」

「そうそう、オリンピックした町です。あそこで僕、生まれたんです」

「そこには浄土真宗のお寺はないでしょ?」

「ありません。日系の方も少ない。日本から移民された方が多い西海岸には日本人街がたくさんありますけど」

僕らが行つていたのはロサンゼルス、サンフランシスコ辺りで、お寺は沢山ありますし、日本人街もあります。でも、アトランタは、ずっと東の方で、フロリダ州の少し北です。

ジョージア州アトランタに大きな日本人街があるとは思えないし、少なくとも、浄土真宗系のお寺は一力寺もありません。キリスト教の文化圏です。そこで育つたけれど、どうしてもキリスト教の教えでは自分が生きていける力にならなかつた。あるいは支えてもらえなかつた。いろいろなことを思われて、仏教を尋ねられたそうです。そして、仏教を尋ねた時に、たまたま浄土真宗のお坊さんに出会われたんだそうです。そして話をして、「あ、これこそ私を救つてくださる、支えてくださる、拠り所となる教えだ、宗教だ」と、そこから、浄土真宗のメンバーになつて、勉強して、京都で得度させていただいて、お坊さんに成られた。そういう方でした。

一番聞きたかったこと

ビクターさんにはいろいろ聞いたんですが、一番聞きたかったのは、「浄土真宗のみ教え、お救いの中で、何が一番心に響いたんですか?」ということです。

ビクターさんは一言で答えてくださいました。

「浄土真宗のお救いの一番響いたところは、オンライン・レシーブですよね」

私は、「他力の信心」だと、「本願力回向の信心」だと、「難信の法」なんて言葉について一生懸命学んできました。そして、「あー、難しい、ピンとこない、分からぬ」と言っていた。その「他力の信心」を、ビクターさんは「オンライン・レシーブ」と、一言で言い切ってくださいました。

それを聞いた瞬間に、身体に電気が流れたような気がしました。

親鸞聖人が書かれた難しく解釈しにくい『愚禿鈔』という漢文のノートのようなお聖教があります。そこに書かれた言葉とピタッと合うようなことを、ビクターさんはシンプルな一言で言つてくださいました。

本願を信受するは前念命終なり。（中略）即得往生は後念即生なり

（『愚禿鈔』、『浄土真宗聖典一註釈版』 五〇九頁）

信心いただいたそのときに、迷い続けてきた命を終えさせてもらって、そこから生きていく命は、迷い続ける命ではなく、信心決定した正定聚の身と成らせていただいた命です。必ずお淨土に生まれて、必ず悟り開く、そんな命になりました。信心と利益が同時である、信益同時を表す大事なキーポイントになるご文です。ビクターさんが、『愚禿鈔』のこの言葉を知つていらしたかどうかはわかりません。

この「信受本願（本願を信受する）」という「他力の信心」は、「阿弥陀さまが必ず救うと願い誓つてくださった本願」を私が頑張つて信じるんじやなく、そのお救いを、ただ受け取るだけでしょうと、他力のお救い、阿弥陀さまの救いを受け取つてくださっているんです。もう、それを聞いただけで、私はもう胸がうわあ～っと、嬉しくなっちゃいました。

帰つてきてからこの話を、もう一回改めて御聖教の上で、さまざまに味わわせていただいた時に、最初に読ませていただいたご和讃に改めて目がとまつたわけです。この和讃のことはもちろん知つていましたけど、そのおこころを改めて深く味わうことができたのです。

信心すなはち一心なり 一心すなはち金剛心

金剛心は菩提心 この心すなはち他力なり

（『高僧和讃』／『淨土真宗聖典註釈版』 五八一頁）

ビクターさんに会わせていただいた時に、「この「」和讃を改めて読ませてもらつた時に、「そうか！
「」信心って金剛心などと仰つてはいる！」と改めてす「」ことだつたと思いました。

この部分を英語でどう翻訳されて解釈されているのかと思つて、英語訳の聖典を見てみました。
そうしたら、「金剛心」は、「The diamondlike mind」（『英訳親鸞聖人著作集』一・二六五頁）と
訳されていました。「ダイヤモンズのよへな心」です。

ダイヤモンズと書つても、キラキラ輝いていてとても高価だと、もう「う」とを言いたいんじや
ないです。ダイヤモンズつていうのは、傷つかない、壊れないことこうことを表す言葉です。

「金剛」という言葉については、親鸞聖人は「金剛不壞の真心」（『教行信証』、『淨土真宗聖典註
釈版一』一一一頁）とも仰つてあります。「金剛心」って、私が作り上げた心じやない。阿弥陀
さまが「必ず救う」と私に届けてくれたそのお救いは、私の心がどれほど変わつても、決して
変わることがなく、決して壊れることがない、そんな心を頂いたんだつて、仰るんです。

ビクターさんは、英語で翻訳された聖典をお読みになつて、

「そうか！ 私がダイヤモンドのような心を作るんじやない。私が仏を求めていくような、そんな素晴らしい心を作つていくんじやない。そんな心を作れない私のために、阿弥陀さまの金剛、絶対壊れない、そんな心が私に届いてきたんだ。響き渡つてきていたんだ。それを今、私は受け取らせていただいたんだ」

とお思いになつたんじやないでしようか。

そんなことを仰る方がジョージア州アトランタにいらつしゃつた。もう、びっくり仰天で、「うわあ～！」って感動して帰つてきたんです。

忘れていく私

私、今年で六十三歳です。もうしばらく、定年まではこの龍谷大学に勤めさせてもらおうと思つております。

定年になる頃には、一緒に研究をしてきた大学院生がたくさんになるんだろうなと思つていま

す。今でも、修了生と一緒に、いろいろなよろこばしいことがあります。これからも修了生が増えて、また楽しい時間を過ごすんだろうなって。今から胸がホクホクしています。

でも、申し訳ないけど、今は楽しく思い出を語っている教え子たちのことも、僕は忘れていくんでしょうね。ごめんなさい。そんなに記憶力も良くないですから、どんどん忘れていくと思します。でも、教え子の皆さんたちが覚えてくださっているから、それは心配ないと思って安心しています。だけど、教え子だけじゃなくて、多分私を一番お世話してくださって、今もお世話になっている家族。一番親しく大事にしなきゃいけない家族のことも、私は忘れていくでしょう。いや、私が家族を忘れても、家族は私を忘れませんでしようから、それも大丈夫だと思います。だけど、一番怖いのは、私が私を忘れていかねばならない、そんな状況もやつてくるかもしれないということです。そうなったとき、私は私の心を奮い立たせて、「いや、阿弥陀さまのお救いを信じなきや」と、「一心・金剛心・菩提心を起こして、阿弥陀さま、阿弥陀さま…」って思い続けなければならぬないんでしょう。

もし、阿弥陀さまのお救いがそんなお救いだったら、私はきっと阿弥陀さまのお救いから漏れていくでしょう。

私は、家族を忘れ、自分を忘れていくかもしれない。申し訳ないけど、その時には阿弥陀さまのことなんて、とつ々の昔に忘れているでしょう。そんな私になるかもしれない……。

もちろん、まだ試したことではないし、経験がありませんから分かりませんけどね。でも、いろんな先輩方を見ていると、心は弱くなり、傷ついて、壊れて、忘れていくんだろうなって、そんなことを思つて、恐ろしさを感じたりします。

私たちの心は壊れていくかもしれません。でも、そんなことは一切問題じやないんです。阿弥陀さまが「あなたの命は死んでいく命じやないんだ」。我が国淨土に生まれさせて、この上ない悟りを開かせて仏にならせてみせる」と。そのお心が、今すでに届いている。その心を受け取らせていただいているから、私の最後がどんなことになろうとも、大丈夫ですと言つていけるような、何者にも搖がされないような大きな安心を頂いているのが、「他力のご信心」を頂いた私たちだつたんですね。

世界に響きわたる『他力の信心』

アメリカのジョージア州アトランタのピクターさんに、ちゃんと阿弥陀さまの他力のお救いは届いていました。龍谷大学大宮学舎の本願講堂に座って、阿弥陀さまの前に座らせてもらつている私たちに、阿弥陀さまのお救いが届いてないわけがないでしよう。

ちゃんと私たち一人一人に、皆さまお一人お一人に、必ず救うという一心・金剛心・菩提心のお救いが届いて、私たちは、ただオンリー・レシーブ——受け取させていただくばかりのお救いに、出遇わせてもらつたんです。

良かったですね。親鸞さまがこうやって、阿弥陀さまの救いを解明してくださったおかげで、私たちはこんなすごい仏さまに遇うことができました。

今日のご法話の肝要として読ませていただく『御文章』は、必ずこれを読ませていただこうと思つて、用意してきました。先ほど紹介しました「聖人一流章」です。蓮如上人が、「親鸞さまがお示しくださった阿弥陀さまのお救いは、何と言つても信心一つのお救い、他力のご信心であ

りました」と仰ってくださった、そのお心を改めてお聞かせいただきます。それでは一座の肝要是挙読の『御文章』にていただきます。

聖人（親鸞）一流の御勸化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候ふ。そのゆゑは、もろもろの雑行をなげすて、一心に弥陀に帰命すれば、不可思議の願力として、仏のかたり往生は治定せしめたまふ。その位を「一念発起入正定聚」と釈し、そのうへの称名念佛は、如來わが往生を定めたまひし御恩報尽の念佛とこころうべきなり。あなしこ、あなかしこ。

（『御文章』／『淨土真宗聖典—註釈版』一一九六頁）

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

【文責宗教部】

(二〇一五年六月十六日 ご命日法要 大宮学舎)

モンゴル帝国の真実

—人命重視の戦争と信仰尊重の統治—

村岡倫

(本学文学部教授)



村岡 優 (むらおか ひとし)

1957年、北海道出身。

龍谷大学文学部史学科東洋史学専攻卒業。

龍谷大学文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。

現在、文学部教授。

【著作】

「石刻史料から見た探馬赤軍の歴史」

(『13, 14世紀東アジア史料通信』15号／2011年所収)

「チンギス・カン世界戦略の「道」」

(白石典之編『チンギス・カンとその時代』、勉誠出版／2015年所収)

『概説中国史』下巻 (共著、昭和堂／2016年)

『「世界」へのまなざし』 (共著、法藏館／2017年)

「アルタイ地方におけるモンゴル帝国時代の仏像の発見とその意義」

(共著、『東洋史苑』90号／2018年所収)

『最古の世界地図を読む』 (編著、法藏館／2020年)

ほか多数。

誤解された遊牧民の歴史

皆さん本日はようこそお参りいただきました。「モンゴル帝国の真実－人命重視の戦争と信仰尊重の統治－」という題名でお話したいと思います。人命重視の戦争と言うと何のこつちやと思われるかもしれません、聞いていただければご理解いただけるのではないかと思います。私の研究は、モンゴル帝国がどうしてあんなに拡大したのかということ、そして、モンゴルや遊牧民は決して暴虐でも残虐でもないということを明らかにすることが中心です。

ディズニー映画で一九九八年に公開された「ムーラン」というアニメがありました。遊牧騎馬軍団との戦いで活躍する中国王朝の女性兵士ムーランを描いたもので、有名な中国の伝説がもとになっています。最近も実写版がありましたね。そこには悪逆非道な遊牧民が登場します。そこでは彼らを野蛮で非文明で暴虐といったような描き方がなされています。画像を見ていただくと明らかに悪意がこもった描き方ですよね。現在のモンゴル人を念頭に、それを悪くしたような、そういうような描き方です。相撲取りみたいな格好もさせたりして。ディズニーの映画というのは、通常であれば公開後よくテレビで放映されたりしますが、ムーランは一度も地上波で放映さ

れたことがありません。世界各地にいる遊牧民の血を引く、特にトルコ系の人たちだったそうですが、かなり抗議があつたのだそうです。それで地上波の放映を断念したということでした。確かに、それの人々にとつては気分のいい映画ではありません。そうなると、これは人権の問題だと思つてしまふのではないでしようか。昔は確かにひどかつたかもしれないが、今も遊牧民がいるのにこういう描き方をすると民族差別に繋がつてしまつてまずいんじゃないか、ということですね。しかし、私は問題はそこではなく、根本的な歴史認識が誤つてることが問題なのだと思います。そもそも遊牧民はそんな暴虐ではないですし野蛮なことも決してありません。それを皆さんにわかつてもらいたい、それが今日のお話の趣旨です。

遊牧民の戦争と統治の論理

遊牧民と農耕民の一番大きな違いは何でしょうか。それは、実は財産に関する考え方の違いです。まず農耕民の財産は土地だというのは皆さんも異論のないところだと思います。例えば、日本では鎌倉幕府の時代から、戦いで功績のあつた武士への恩賞というのは土地でした。一族の領

地を増やすために武士たちは命を懸けました。それが封建制の基本です。一方、遊牧民の財産は何かというと、もちろん家畜であることも異論はないでしょう。しかし、家畜として飼われている例えば羊などは、食糧としては二歳が一番おいしいんだそうで、二歳になつたら食べられていなくなってしまいます。二歳じゃなくても生き物である以上、寿命があります。そうしますと羊を恒常的に家畜として、毛だとか皮だとそういうものも利用しつつ、食料にもするには、それを世話する人が必要なのです。ですので、引いて言えば、家畜を世話する人が財産だと言つてもいいわけです。例えば戦いで、功績のあった人への恩賞というのは実はそういう「人」なんですね。文献には、戦いの後の恩賞の分与に関して、お前に何人、お前に何人、百人、二百人というような記述があります。人間が一人で世話できる家畜は、その人の上手い下手もあり、家畜の種類にもありますが、少なければ百頭、多ければ倍の二百頭ぐらいは見ることができるということです。馬に乗れば、それぐらいの面倒は見ることができるそうです。これが馬に乗らなければ二十頭が限界だと言いますから、いかに、家畜の放牧の際には、馬に乗ることが重要であるかわかります。つまり、人を一人失うと百頭から二百頭の家畜がいなくなる、と考えたらしいと思います。これが百人だと一万頭から二万頭になるわけで、かなりの数ですよね。ですので、戦いがあれば、

遊牧民同士ですと自分の軍団からできるだけ兵士を減らしたくない、殺されたくないですし、相手の敵もできるだけ殺したくないのです。皆殺しにしたら恩賞はないですから。ですので、戦いの前には基本的には降伏を勧告する、できるだけ無駄な戦いはしない、殺し合いに持ち込まない、ここが非常に重要なところなんです。

ただ、そうなると敵に侮られることもありますから、相手が降伏せず、とことん戦つて、こちらの被害も大きく、最後になんとか勝つことができたとなると、コントラストをつけるために残虐な殺し方をすることがあります。そうすることことで、次の戦いを避けることができるわけです。あいつらには抵抗するのはやめて、早く降ろうと思わせるということですね。だから全然残虐じやないとは言いませんが、基本的な考え方は、表題にありますように人命重視なんだということです。それを考えると、土地さえ手に入れてしまえば、住んでいる農民、住んでいる人間には用がない、あるいは邪魔だという農耕民の方が、いつたん戦争が起こつてしまふと、実ははるかに残虐だと言えます。

この遊牧民の価値観は、農耕地や定住地を征服する時も同じなのです。征服成功の恩賞はやは

り「人」なのです。しかし、土地を取るならば、必ず人とセットなんです。農耕地を取つた以上はそれを耕す農民がセットで、都市を取つた以上はその都市で働く人々もセットで取るわけです。遊牧民は農耕などできませんし、都市で仕事などできませんから、農地や都市だけを取つても意味がありません。恩賞で与えられた人々の生活にも干渉はせず、今まで通りの生活をしてもらい、そして稼いだ分から税を払つてもらう、これが彼らの考え方なんですね。

昨今、イスラエルとイランのミサイルの撃ち合いが報道されていますよね。そのような戦争の様子を聞けば、モンゴル帝国の兵士たちは、何と馬鹿なことをと嘲笑するはずです。破壊された都市・農地、人が生活できない都市、農業のできない農地など獲得しても全く意味がありませんから。

婚姻と商業で結ぶモンゴルの支配

モンゴルで毎年開催されるナーダムという国民的な祭典があります。写真を見てください。子どもたちが乗つていて、おなじみの景観です。そうすると、子どものためのレースのような

(写真①)



イメージになつてしまふのですが、そうではありません。いろんな距離があるらしくて、三十キロとか半分の十五キロとかありますが、重い大人が乗ると馬が疲弊しますので、子どもが乗るんです。子どもが乗るのは馬のためといつていいと思います。それだけ、彼らは馬を大事にします。

私がモンゴルで撮った写真を見ていただきますが、この写真、羊とヤギがかなりの数、三百頭ぐらいはいたかと思います。それを一番上方に写っている人、一人で放牧していました(写真①)。ちょっとと拡大してみると、なんか女性っぽく見えんんですけど、どうでしようか。遊牧民は女性も馬に乗り放牧します。この人がいなくなれば、この三百頭ぐらいの家畜は散り散りバラバラになつ



(写真②)

てしまします。中には勝手に主人のところに帰つてくる家畜もいるかもしませんが、多くはどこに行つたらいいかわからなくなり、さまよい続けることになつてしまします。羊はそれほど賢くありません。人を一人失うと家畜が何百頭も失われることになる、ということを分かつていただけるのではないか。別になくてもいい写真なのですけど、私が馬で調査したことがあるのでその写真を入れておきました（笑）（写真②）。

ただ、恩賞は人だと言つても、かつての敵を獲得した後、昨日までの敵をどうやつて納得させて、そして支配下に組み込んでいくか、というのは非常に難しい問題ですよね。まず、遊牧民同士であ

ればどうしたでしょうか。モンゴル高原は一二〇六年にモンゴルが統一していますが、それ以前はたくさんの部族が割拠していました。モンゴルと敵対した部族を挙げると、メルキト、ナイマン、ケレイト、タタルなど、いずれも当時の有力な部族です。この図はチンギス・カン家の系図です。見ていただいたらわかるように、チンギス・カン家の人々は、メルキト、タタル、ナイマン、ケレイトの女性たちを妻にしています。例えば、チンギス・カンの後を継いだオゴデイという二代目のカンの妻はナイマンで、彼女から生まれた息子が三代目のグユクであり、彼の妻も敵対勢力であったメルキトの女性です。さらに「蒙古襲来」、「元寇」で有名なクビライの父トルイの妻は、これも敵対勢力であったケレイトの女性であり、彼女から生まれたのがクビライでした。ついこの間までモンゴルと敵対していた人々にしてみたら、これらはちょっと安心できることですよね。次のカンが自分たちの部族の血を引いているということになるのですから。これは逆ももちろんあります。それらの部族に男性を婿としてやることです。これも遊牧民の人命重視という価値観からきているものなのです。ほとんどの敵が殺されず、自分たちの配下に入るわけですから、その時にいかに気分よく、自分たちの仲間になつてもらうか、それが非常に重要なところだったのです。

では、遊牧民以外の人々、まず商人に対してはどうだったのでしょうか。実は、商人を配下に組み込む手は一番簡単です。儲けを保証してやればいいのです。モンゴル帝国ができる直前の世界は、もうバラバラの状況でした。いろんな勢力、いろんな国家が乱立しています。この状況は、商人、特に遠隔地交易を営む商人にとつてみれば、望ましい状況ではありません。国と国、勢力と勢力の境を越える時に、スペイジやないかと疑われることもありますし、いらぬ関税が取られることもあります。当時、実際にそうでした。ところがモンゴル帝国ができますと、西方にいろんなカン国が分立はしましたが、一つの帝国として緩やかに結びついていました。モンゴル帝国ができた結果、商人たちは儲かった時に売り上げの三パーセントの税を帝国に払う、これで済んだのです。以前のように、多くの国家や勢力がバラバラに存在し、その国境を越えるたびに関税がかかるていた時とは違い、商人たちは大いに潤いました。

モンゴルの宗教保護政策

さて、今度は農耕民など定住民なんですけど、これが一番難しいんですよね。一番いいのは税

を取らないことだと思うんですけど、まあそういうわけにはいきません。そこでモンゴルが考えたのは宗教を手厚く保護する信仰尊重の統治なんです。なぜ宗教に目をつけたんだ、という研究の話をすると長くなるので、これはちょっと置いておきまして、とにかく宗教教団を手厚く保護すると定住民たちは徙つてくれるということを学びました。

例えば、中国の各地にモンゴルが中国を支配して立てた元朝時代の碑文が残っています。山西省に玄中寺という有名なお寺があります。浄土宗・浄土真宗の祖庭に当たりますので、我々にも関係が深いところです。そこをはじめ、いろんなお寺や道觀、道教のお寺ですね、あるいは孔子廟に、モンゴル・元朝時代の碑文がたくさん収蔵されています。多くは免税・寄進・安全を保障することが記されている碑文です。一つだけ見ていただくと、これは有名な少林寺で、その境内の一番大きな大雄殿、その前に碑文が立っています。一九八〇年代に地中から発見されたということもあって、非常に綺麗でよく見えます。表側は漢文で裏側がモンゴル語で書かれています。これ実は裏表が逆で、明らかにモンゴル語の方が先なんですが、龜の台座と、その上の碑の部分が別々に出てきたので、立てる時に漢文を表にしたのです。もとはモンゴル語の方が表だったのでしょう。この碑文も少林寺に対する免税、寄進、それからこの少林寺に入ってきて、ひどいこ

とはするな、すれば容赦しないぞ、というような命令が書かれています。

元朝は都を大都（今の北京にある）に遷しますが、元朝成立以前、都だったのはモンゴル高原のカラコルムでした。一二五〇年代にこの地を訪れたフランス人の修道士ルブルクの旅行記に書いてあることですが、カラコルムには異教の寺院が一二あったそうです。これは、おそらく仏教寺院だとか道教の寺院、それから孔子廟とか全部含めたものだと思います。他にも、イスラム教の礼拝堂が二つあり、キリスト信者のための教会があつたということです。しかも、西方出身の様々な人たちがここに住んでいたことが記されています。中国人もたくさん住んでいたことがわかります。これらの宗教施設は、そういう人々のために建てられたものだと言つてよいでしょう。

モンゴル以前のウイグルもそうなんですが、遊牧民は都市を造ります。だけど、これは遊牧民の定住を意味するわけではありません。彼らは、モンゴルもそうですが、あいかわらず季節移動をしているんです。じゃあ何のためにこんなカラコルムのような都市を建てるのかというと、そういう遠方からやつてきた様々な人々のためなんです。長期滞在できるような街がなければ、こういう人たちには行こうという気になつてくれません。彼らは滞在中に遊牧民と一緒に移動生活な

どしたくありませんから。

また、宗教施設がなくとも行きづらいのです。当時の故郷から離れてやつて来る商人たちにとつて、一番心配なのは、行つた先で自分が死ぬこともありますよね、その時に自分が信仰している宗教で、ちゃんと葬つてくれるのかどうかということです。カラコルムまで行つても、自分が信仰する宗教施設がちゃんとあるというのは非常に安心できることなんです。商人だけでなく、國家形成した以上は他国の使節を受け入れることもあるでしょう。これらの人々を安心して来てもらうためには、彼らのための宗教施設を充実させることが大事だと言つていいと思います。カラコルムの遺跡の図面をご覧ください。発掘の成果として、ここに教会があつたことがわかつています。そして、この興元閣というのは仏教寺院です。他にもたくさんあつたことは、先ほどお話ししたルブルクの記述からわかります。発掘調査ではまだイスラムの礼拝堂はわからないんだそうです。

仏像発見が語るモンゴルの宗教観と統治理念

我々の調査で、モンゴル帝国時代の仏像を発見したことがあります。ここはモンゴル西部のアルタイ山脈のすぐそばのチンカイというところで、モンゴルから中央アジアに向かう交通路のモンゴル側の最前線になつた場所です。チンカイ土城の遺跡は、Google Earth でも見られます。ドローンで撮つた画像を見ると、土城の真ん中に基壇があり、建物があつたことがわかります。ここで一〇一六年に発掘調査したところ、仏像の一部を発見しました。手と足だけでした。この仏像は粘土でできているのですが、ここにある芯棒の分析の結果、チングイス・カンとほぼ同じ時代だということが明らかになっています。

当時の入澤崇学長から、ガンダーラの特徴を持つている仏像だとコメントをいただきました。

そのころモンゴル人はまだ仏教を信仰していません。チンカイの地というのはモンゴル高原から中央アジアへの最前線で、そこで農業が行われていて、農民たちがたくさん連れて来られたことがわかっていますので、その人たちのために作られた仏像だということが考えられます。これまで、連れて来られた農民は奴隸のような扱いを受けていたように考えられていましたが、彼

らは決して奴隸ではなかったわけです。奴隸のために仏像を作らないですから。モンゴルは彼らの信仰をじゅうぶんに尊重していたと言つてよいでしょう。

仏像が発見された次の年、築地本願寺で記者会見もおこないました。入澤先生の学長就任一年目の時で、先ほどのコメントも、この時にいたいたものです。その後、たくさんの新聞がこの発見を報道してくれたのですが、ほとんど私の名前が出てこなくて、唯一、中日新聞滋賀版に、私の名前を載せていただきましたので、それだけ紹介しておきます。

しかし、仏像が出土した年はその場に埋めてき

(写真③)



(写真④)



たんです。切り出したり、運搬したりする用意を何もしていませんでしたので、仕方ありませんでした。何とか切り出して保管したいということで、大学に支援をお願いした結果、お金を出していただけのことになつて、翌年の二〇一七年に、仏像を何日かけて丁寧に切り出し、首都のウランバートルに運搬し、保管することができました。

さらに翌年二〇一八年には、モンゴル国立博物館で出土物の展示会を開催し、その時には入澤学長に開会のご挨拶をいただいています（写真③）。仏像が出たシャルガ郡の文化センターのセンター長に寄贈する式典もおこないました（写真④）。この写真は私が撮ったのですが、入澤学長の後ろに仏像があるんですよ。他にも三、四枚撮っている

んですが、仏像が一緒に写っているのが一枚もなくて…。後で悔やみましたが、カメラマンとしては最低でしたね（笑）。

このような話をすると、モンゴルは、定住民・農耕民の信仰を尊重したというわけではなく、彼らを支配するための政治的な方策として利用したにすぎない、ということになりそうです。ところが、こういうものがかつて発見されました。『驚異の雑纂』といって、現在トルコのイスタンブル大学図書館に所蔵されているもので、その中にクビライの遺訓が所収されています。「クビライ・ハンが鷹になる時」というのは亡くなつた時を意味し、ですから遺書と考えられています。自分たちの子孫に、国を集め、国を成り立たせるなら、人々の体を集める前に心を集めよ、心さえ揃んでおけば、人々はどこにも去らないんだと子孫たちに語りかけているのです。ここから考えると、クビライは、宗教を重視する、そうすることによって人々が自分たちを支持してくれるんだ、そういうことがちゃんとわかつていたんだと考えられます。クビライの統治の理念がわかる非常に重要な遺訓じやないかなというふうに思います。

モンゴルが遺した共存の理念

決して政治的な配慮だけでなく、クビライ自身が国家運営のためには、人々の信仰を尊重することが大事だと、しっかりとした考えを持っていたのでしよう。モンゴルは、国を作るときに、人々を下手にまとめない、別々だつたら別々でいいし、まとまらなかつたらまとまらなくていいから、それぞれの文化、宗教、それぞれを尊重するんだということが、彼らの考え方じやなかつたのかなと思うんです。そういう意味では、現在のアジアの国々というのは非常に広大ですよね。それに比べてヨーロッパの国々って小さいじゃないですか。これは一体なぜかというと、実は理由は簡単で、反対意見もあると思いますが、私はモンゴル帝国に支配されたことのある地域と支配されたことのない地域の違いだと思っています。ヨーロッパは言語が違う、宗教が違う、民族が違うとなつたらなかなか一つにならないですね。だからこんな細々としています。ところが、アジアの国々は違うじゃないですか。違う言語、違う宗教、違う民族の人々が集まつてつくっている国家が多くあります。もちろん、現在は各国で少数民族の問題だとか、いろいろあると思うんですけども、人がいかにまとまらずに、無理やり上から押し付けられずに、どのように

一つの国をつくるかという理念、これをアジアの人々はモンゴル帝国の支配を経験して学んだんじゃないかなというふうに思います。我々が、モンゴル帝国から学ぶことの一つではないかと私は考えています。ということを最後に、お話を終わりにしたいと思います。本日はありがとうございました。

【文責宗教部】

(一〇二四年十一月十五日 お達夜法要 深草学舎)

受け継がれるもの

(本学非常勤講師・興正派參務・興正寺寺務)
北岑 大至



北岑 大至 (きたみね ひろし)

1977年、福井県出身。

東京経済大学経営学部経営学科卒業。

龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。

現在、龍谷大学非常勤講師。真宗興正派参務・本山興正寺寺務。

【著作】

「三業惑乱期における興正寺関係資料の研究－大麟師『真宗安心正偽編』を中心にして－」
(『真宗學』116／2007年)

「大麟『真宗安心正偽編』成立の一考察」
(『龍谷大学大学院文学研究科紀要』29／2007年)

「近世興正寺教学の一考察」(『印度學佛教學研究』56 (2)／2008年)

「三業惑乱関連書籍の翻刻と註釈：讃岐の法義騒動と大麟『真宗安心正偽編』」
(『龍谷大学佛教文化研究所紀要』52／2013年)

「近世佛光寺教学史研究への一視座」
(『真宗研究：真宗連合學會研究紀要』60／2016年)

ほか多数。

講題

極重の悪人はただ仏を称すべし。われまたかの攝取のなかにあれども、煩惱、眼を障へて見たてまつらずといへども、大悲、倦きことなくしてつねにわれを照らしたまふといえり。

（『教行信証』／『淨土真宗聖典—註釈版—』二〇七頁）

皆さま、こんにちは。ようこそお逮夜法要に足をお運びくださいました。短い時間ではございますが、親鸞聖人のお念佛のみ教えを、共にお聞かせいただければありがたいことだなあと思つております。

受け継がれるもの

本日のお逮夜法要のご縁を頂きまして、「どのような講題でお念佛のみおしえを聞かせていただきこうか」と思案しておりましたところ、この顕真館の入り口でふと目に入ったのが『りゅうこ

くブックス』の一三七号でした。

表紙に「うけつがれるもの」と書かれた『りゅうこくブックス』をパラパラとめくっていたとき、「受け継がれるもの」とは、私にとつてどのようなものだろうか」とふと思いました。そこで今日は講題を「受け継がれるもの」とさせていただき、ご一緒に考えるきっかけを頂ければと思つております。

ところでこの『りゅうこくブックス』も一九七八年に発刊されて以来、一三七号まで出ているわけですから、この冊子も長い間受け継がれてきたものです。

『りゅうこくブックス』の一項目を開きますと、そこには龍谷大学の「建学の精神」が書かれております。

すべてのいのちを大切にする「平等」の心

真実を求める「自立」の心

常にわが身をかえりみる「内省」の心

生かされていることへの「感謝」の心

人類の対話と共存を願う「平和」の心

平等・自立・内省・感謝・平和——この五つも、長い龍谷大学の歴史の中で受け継がれてきたものに他なりません。

平等のこころ

「建学の精神」の一つ目は、「すべてのいのちを大切にする〈平等〉の心」です。しかし、私はこの一つ目の心でさえなかなか普段の生活でできていないなど感じます。

私は現在六歳になる娘がいます。昨年、娘が誕生日を迎える前に「生き物を飼いたい」と言いい出しました。

「ええ……生き物を飼いたい？ 何を飼いたいの。ワンちゃん？ ネコちゃん？」

「まだ教えない」

「じゃあ今度、一緒にペットショッピングへ行つてみようか。何を飼いたいのか分からぬけど、

ちゃんとお世話を育てていけるか考えようね」

誕生日前の突然の予想外な要望に少し戸惑いましたが、そんな会話をしました。

誕生日の少し前、娘の手を引いてペットショップへ足を運びました。

内心は、娘が何を飼いたいと言い出すのか心配をしておりました。家は様々な方が出入りするお寺ですので、犬や猫の苦手な方もいらっしゃいます。ですから、犬を飼いたいと言い出したらどうしようかな、猫を飼うのもなかなか大変だなと思つていました。

ペットショップへ入り、入口近くに設けられていた犬コーナーを娘は見向きもせずに通り抜けました。猫コーナーも素通りです。あ！よかったです。犬や猫ではなかつたんだとちょっとホッとしました。

娘が足を止めたのは、小さなゲージの前でした。そのゲージの中には子どもの手のひらサイズの生きものが元気よく輪っかの中を走り続けています。なるほど。娘が飼いたかったのはハムスターでした。ハムスターとネズミの違いが分からぬ私は、心の中で「ネズミやん……」と思いました。あまり乗り気ではなかつた私は娘に「これは家とか、裏の蔵にたくさんいるよ。わざわざ飼わなくともいるよ」と話しました。

すると娘は、「そう言われると思った」とぼそり。

娘は、祖母がホームセンターでピンク色の餌や、粘着シートなどを飼つてきて、ネズミを捕獲している姿を知っています。ハムスターを飼いたいと言つたら、おばあちゃんにダメって言われる、もし飼えたとしてもおばあちゃんが粘着シートで捕まえてしまうかもしれない、そう思つて飼いたい生きものを娘は言えなかつたようです。

悲しそうに俯いている娘に「どうしてハムスターが飼いたいの?」と尋ねました。するとテレビ番組で『とつとこハム太郎』というハムスターを主人公にしたアニメがあり、それを見て「これはかわいいな、飼つてみたいな」と思つたみたいです。

「でもネズミだから難しいんじゃないかな」と話すと、娘も「おばあちゃんに捕まえられたら嫌だから」と言つて諦めてくれました。

しばらくペットショップを歩きながら移動していると、娘は「これを飼いたい」と足を止めました。何かとのぞいてみると、水槽の中を気持ちよさそうに泳いでいる綺麗な色をしたメダカでした。

「メダカだつたら飼えるよ。家でも育てやすいしね」ということになりました。

でも値段を見ると、メダカつて意外といい値段がします。それで思い出しました。メダカを飼つている友人がいたなど。すぐにその友人に電話をして事情を話すと、「すぐにおいでよ。たくさんいるから譲つてあげるよ」と話しかけてくれました。

有難いと思い、娘を連れてすぐに友人宅へ向かいました。庭にはいくつもの大きな桶があり、その中で色とりどりのメダカが模様分けされて泳いでいました。友人は「どれでも好きなものを選んでいいよ」と娘に声をかけてくれました。

娘は、背中がピカピカと光っている青色のメダカや、錦鯉のようなメダカを網ですくい、小さなバケツに移していました。結局、メダカ十一匹を譲つてくれることになりました。

メダカを家に持ち帰る前に、妻にもメダカを持ち帰ることを伝えようと電話をしました。すると妻は、「水回りの生きものは蚊が発生するから困るよ」と言います。友人にそのことを話すと、「メダカは蚊の幼虫であるボウフラが大好物だから、蚊が発生することは少なくなるよ」と教えてくれました。だったら安心だということで、その日から我が家ではメダカを飼うことになりました。

祖父が昔使っていた火鉢を蔵から引っ張り出してきて洗い、水を張ってメダカを泳がせました。それが四月頃のことです。

メダカは四月頃から産卵を始めます。メダカを飼うことは初めてでしたので、どのような卵が生まれるのか、どのように育っていくのか全く分かっていません。ですから、友人に教えてもらいい、産卵しやすいように水草や産卵床をメダカ鉢の中に入れて準備をしました。

メダカの餌を買ってきて、毎日娘と二人で餌をあげながら世話を始めると、二週間ほどたつたある日、メダカ鉢に入れていた産卵床を取り上げてみると、小さな黄金色をした粒がプチプチとついていました。二人で「生まれた！」と大声を上げて喜びました。

大人のメダカは稚魚を餌と間違えて食べてしまう場合があります。ですから卵の時期に親メダカとは異なる水槽に移さなければなりません。卵を産卵床から取りはずし小さな器に移し替えていきました。

それから毎朝、娘と「いつ生まれるかな?」、「何色のメダカが生まれてくるかな」などと話しながら卵の観察が始まりました。

観察が始まって一週間ほどたった朝です。卵を入れた小さな器のなかで、ピピッ、ピピッと動く小さな生き物を発見しました。「やつた！生まれた」とまたも一人で大喜び。

メダカの稚魚は針子と呼ばれます。生まれて数日はお腹にある「ヨークサック」（卵黄の袋）から栄養を吸収するため餌は不要ですが、その後は針子用の餌が必要です。ホームセンターへ行き、針子用の餌を買ってきて、娘と一緒にパウダー状の餌を毎朝あげるようにしました。三日目、四日目、五日目と餌をあげるうちに、生まれてきた生きものは、小さな器のなかでどんどん成長しているように見えました。

けれども一週間ほど経過したとき、少し違和感を覚えました。針子はメダカの子供ですから、魚のように泳ぎだすはずです。しかし、いつこうに魚のようにスイスイと泳ぎません。成長がうまくいっていないのかなあと疑問に思いながら、数日見守っていましたが、やはりどこかおかしい。スマートフォンでその生きものを撮影し、インターネットで調べてみることにしました。

娘とスマートフォンの画面を覗きこみながら針子の画像が出てくるのを待っていました。ところが何度も検索してもメダカや針子の画像が出てきません。代わりに何が出てきたのかというと、「ボウフラ」の画像が出てきます。そんなはずはないと思い、何度も検索をしましたが、出てくる

る説明は「ボウフラ」ばかりです。

そうです。そうだったのです。私たち親子は、この一週間、朝早くからボウフラに餌を与える成長をよろこび、大事に大事に育てていたのです。

道理でスイスイとメダカのように泳がないはずです。その事実がわかると、人間って酷いものです。だんだん腹が立ってくるんです。数分前まで愛おしかった針子と思い込んでいたその生きものは「この憎らしい生きものめ」と思えてくるのです。

「メダカは蚊の幼虫であるボウフラが大好物」

友人から教えてもらつたこの言葉を思い出しました。すぐに近くにあつた大き目のスポットを手に取り、小さな器にうごめくボウフラを吸い込んで、親メダカの泳ぐ鉢に流し込みました。すると親メダカはすぐに近寄ってきてパクリ。「やつた、食べた！」。またボウフラを吸い込んで入れてやるとパクリ、パクリ、パクリ。面白いほど親メダカはボウフラを食べてきます。

その時です。突然、隣にいた娘が大声で、

「うわあああああーーっ」

と泣き出しました。

「えっ、どうしたの？」

と聞くと、娘は泣きながらこう言うんです。

「お父さん！お坊さんにくせに……！いつも〈生きものを大事にしなさい〉って言つてるくせに！」

と、大声で私に叫ぶんです。私は、

「大丈夫。これはボウフラだから、メダカの大好物なんだよ」

といつて、泣いている娘に言い聞かせながら、横でまたボウフラを親メダカに与えました。

娘からすれば、毎朝早くに起きて、餌をあげ、愛おしく成長を見守つてきた生きものが、ボウフライだろうがメダカの子供だろうが、そんなことが大きな問題ではありません。けれど私にとつてメダカの子供は育てるもの、ボウフライは食べられても構わないもの、といういのちの選別が間違ひなくありました。

その日から——娘と二人で過ごしていた朝の親子の幸せな一時はなくなりました。いまも私が一人で毎朝メダカに餌をあげております。

人間って勝手な生きものです。ボウフラと知るまでは、「かわいいな」「大きくなれよ」と思つて育てていました。それがボウフラだと分かった瞬間、すぐに腹が立ち、憎しみが湧いてくる。人間の「怒り」は、よく瞬間湯沸かし器などと言われますが、確かにそうだなと思います。目の前で起こっていることが、私の都合で良くも見えたり、悪くも見えたりします。私の勝手で、さつきまで良い人だと思っていた人が、次の瞬間には悪い人に見えてします。

自分の都合で良くも悪くもころころと移ろつてしまふ、いのちの価値に上下をつけてしまう、そのような私たちの心根をもつあり様を仏教では「凡夫」と呼んでいきます。親鸞聖人はそのような私たちの姿こそ「悪人」だと教えてくださいます。

龍谷大学の建学の精神の一つ目に掲げられている「すべてのいのちを大切にする〈平等〉の心」、この心を生み出すことさえ私たち「悪人」にとつてはとても難しいことです。

だからこそ平等の心を自分たちの力で生み出すことのできない私たちには、「すべてのいのちを大切にする〈平等〉の心」に気づかせてくださる「教え」が必要になるのです。

親鸞聖人は「正信念仏偈」の中で、

極重悪人唯称仏

極重の悪人はただ仏を称すべし

（『教行信証』／『淨土真宗聖典—註釈版—』二〇七頁）

と、お示しくださいます。「極重の悪人」である私たちには、「ただ南無阿弥陀仏を称すべし」以外にないと教えてくださるのです。

お念佛を通して気付いていくもの

親鸞聖人がご生涯を通じてお伝えくださったのは「南無阿弥陀仏を称すべし」との教えです。それは、南無阿弥陀仏を通して阿弥陀仏のご本願に出遇っていく教えでもあります。阿弥陀仏のご本願に出遇うとは、どのような願いに出遇っていくことなのでしょうか。

私の田舎は、福井県の山間にあります。その山間の小さな集落にお寺があります。

五十件ほどの小さな集落では、五月五日の端午の節句の時期になると必ず話題になるお家があります。集落のみなは、その時期にその家を見て、「ああ、またこの季節がきたな」と思います。その理由は、どこよりも大きな鯉のぼりが高々と揚がるからです。端午の節句の一週間ほど前から揚がり始め、過ぎれば三、四日で片付けられます。

鯉のぼりを揚げているのは、その家に住む八十六歳のお父さんです。毎朝六時頃に揚げ始め、夕食前に下げられます。それが毎年のその時期の日課です。

三年前の五月五日、まさに端午の節句の日、私が朝のお勤めに出かけるところでした。車に乗つて集落を走っていた時、お父さんがちょうど鯉のぼりを揚げているとことでした。二階の屋根に伸びるほど高い竹の先端には矢車が回り、吹き流しの下には真鯉、紺鯉、子鯉が風を受けて泳いでいます。その鯉のぼりは、つぎはぎだらけで、何十年もの間、大事に大事に揚げられているものでした。

ご門徒さまの朝のお参りを終えてお昼前に家に帰つてくると、その鯉のぼりのお宅から一本の電話がありました。電話口から奥さまのお声が聞こえてきました。

「今朝、お父さんが畠で倒れて病院に運ばれました。お医者さんから、今日、もしかするとダ

メかもしれないというお話をいただきました。お寺さん、心づもりをしておいていただけませんか」

夕食を食べ終わつた頃でしようか、家の電話が鳴りました。電話口からは昼間に聞いた奥さまのお声でした。

「やっぱり……ダメでした。枕勤めをお願いできますか」

聞くと、朝、お父さんは鯉のぼりを揚げ、畑に向かいそこで倒れているのを発見されて、救急車で運ばれましたが、夕方に息を引き取つた、とのことでした。

枕勤めのためにお宅へと足を運びました。庭先には、お父さんが今朝揚げられた鯉のぼりが上がつたまま、風のない暗闇の中で垂れ下がつっていました。

それから一年が経ち、一周忌のお勤めの日がやつてきました。一周忌のお勤めはお寺で勤め、法事の後はご家族と控室でお茶を頂きました。お父さんの奥さま、息子夫婦、そしてお孫さんなど一〇名ほどだつたでしようか。

お茶を頂きながらお父さんの思い出をみなで語つていた時のことです。私がふと、

「あの鯉のぼりを揚げていたお父さんの後ろ姿が忘れられません」

と、お父さんの思い出をお話しました。

すると、六十五を過ぎた息子さんが、

「あの鯉のぼりは、本当に嫌だつたんですよ」

と、笑いながら言わされました。予想外の返答に「えっ！」と声を出してしまいました。

息子さんはこう続けられました。

「あの鯉のぼりは誰のために揚げている鯉のぼりか知っていますか？　あの鯉のぼりは、六十年も過ぎた私に揚げていた鯉のぼりだつたんですよ。うちの父親は過保護過ぎなんです。

思春期を迎える中学生のころ、友達の家に自転車で遊びに行こうとすると、父親も一緒になつて自転車で家の前までついてきました。夕飯になると、呼んでもいないのに、友達の家の前に自転車で待つていてるんです。

高校へ進学する時も、あそこの高校へ行け、部活はこれがいい、と父親に決められてきました。大学進学の際も、就職にはこの大学がいいだの、卒業すると今度はいい会社が地元にあるから戻つてこいと言われ、結局、地元に帰つてきました。

自分の人生にずっと干渉してきた過保護な父親が、望んでもいないのに私のためにといって揚げ続けていた鯉のぼりは見るのも嫌でした。」

同じ鯉のぼりを見ているのに、全く見え方が違ったんだなあと思いながら、私は話を聞いていました。

続けて息子さんは、言葉を少し切って、こう続けられました。

「でもね……。一年が経過して父親の姿が見えなくなってきたんです。食卓にいたはずの父親の姿が、亡くなつて数か月はそこにいた気配としてぼんやりと見えていました。畠仕事から帰ってきてリビングで横になりながらテレビを眺めている父親の姿も思い出せなくなつてきました。父親の姿が日常から薄らいでいきます。

いま一年が経つて、唯一、鮮明に思い浮かぶ父親の姿は、嫌で嫌でたまらなかつた鯉のぼりを揚げている父親の後ろ姿しかありません。

振り返つてみると、憎たらしいと思っていたあの父親の後ろ姿は、六十数年、毎年欠かさず私の成長を願い、私のためだけに願いをかけてくれていた父親の後ろ姿だつたなど、一年が過ぎ、最近になつてようやく気付かせてもらつた気がします。

私にも子供ができ、孫ができて、この子たちを見ていると、父親の我が子を願い続ける心がなんとなく分かったような気がします。」
と、このようにお話しくださいました。

それから五月五日が近づいたある日、いつものようにご門徒のお宅へ朝のお勤めに出かけようと集落を車で走っていました。すると、亡きお父さんが揚げていたつぎはぎだらけの鯉のぼりを一生懸命に揚げようとしている息子さんの後ろ姿がありました。それを見て、

「ああ……かけられた〈願い〉というものは、このように受け継がれていくんだな」と、そんな思いがこみ上げてまいりました。

私たちは、生きているときに身近な人から願いをかけられすぎると腹が立つのかもしれません。近すぎる願いは鬱陶しいと感じてしまうことがあるのかもしれません。たとえ願いに気づいたとしても知らないふりをしたくなる。でも——ある時、「ああ、こんな私でも〈願い〉がかけられてあつたんだ、見捨てられることなく〈願い〉のなかに生かされてあつたんだ」と気づく場面が来るの

だと思います。そしてその気づきは、私に受け継がれてあるものを、次の者へ受け継いでいく身にさせていくのです。

つぎはぎだらけの鯉のぼりを揚げていた息子さんの後ろ姿を眺めながら、そんなことを教えられた気がします。

親鸞聖人がお伝えくださったお念佛のみ教えもまた一緒なのでしょう。本日冒頭にお伝えをした「正信念仏偈」には次のような一節があります。

極重惡人唯稱仏 我亦在彼攝取中

煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

（『教行信証』／『淨土真宗聖典—註釈版—』二〇七頁）

極重の惡人はただ仏を称すべし われまたかの攝取のなかにあれども

煩惱、眼を障へて見たてまつらずといへども 大悲、倦きことなくしてつねにわれを照らし

たまふといえり

なぜ南無阿弥陀仏を称える身になつてゐるのだろうか、どうして仏さまの前に座つて手と手を合わせる身になつてゐるのだろうか。

分かろうが、分かるまいが、いまこうして仏さまの前に座り、南無阿弥陀仏が口をついて出でる。そこには、私が望もうが、望むまいが、すでに南無阿弥陀仏を受け継ぎ、伝えてきてくださつた多くの念佛者の後ろ姿があつたからにほかなりません。それはお父さま、お母さまの後ろ姿かもしれません。おじいさま、おばあさまの後ろ姿かもしれません。ご近所さんの、友人の、恩師の後ろ姿かもしれません。いずれにせよ量ることのできない、多くの受け継いできてくれたさつたきつかけが私のところに結実して、南無阿弥陀仏を申す身にいまさせていただいているのです。

そして、いまここで南無阿弥陀仏が私に受け継がれてきたということは、阿弥陀仏のご本願が極重の悪人である私を、あなたを見捨てないと常に照らし出してくださつてゐる証拠でもあるのです。

本日、ここ顕真館において、お念佛に出遇うひと時を「一緒に過ごすことができました。一人

一人に至り届いた南無阿弥陀仏を通して、私にかけられた願い、届けられた願いについて考えるきっかけに少しでもなればありがたいことであるなと思います。

本日はようこそ御遠夜法要に足をお運びくださいました。最後にもう一度、ご一緒にお念佛を申して、終わりにさせていただきます。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

【文責宗教部】

本書は二〇二四年度から二五年度までに開催された法要および公開講演会のうちから五篇を掲載いたしました。ご協力いただきました先生方ならびに『りゅうこくブックス』の製作にかかわっていただいた多くの方々に感謝申し上げます。

コロナ禍も落ち着きを見せ、キャンパス内にも明るい声が響いています。しかし、世界各地では依然として争いが続き、人間同士の対話の困難さを痛感せざるを得ません。このような現代社会において、私たち一人ひとりがいかにして「いいのち」の尊厳を見つめ直し、他者とともに生きる道を摸索するかが問われています。

本書に収められた講演の数々は、それぞれの立場から現代人の苦悩と希望を見つめ、私たちが進むべき道を静かに照らすものです。読者の皆さまにとつて、本書が自己を見つめ、他者との関わりを新たに考える契機となれば幸いです。

（宗教部）

ただ、受け取るのみ

— only receive —

「りゅうこくブックス」 No.139

二〇二六年一月三十一日 発行

発行
龍谷大学宗教部
〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67

顯淨土の願い	一樂 真
悪人が目当てなら……	井上 見淳
世界に響きわたる「他力の信心」	葛野 洋明
モンゴル帝国の真実 一人命重視の戦争と信仰尊重の統治 —	村岡 倫
受け継がれるもの	北岑 大至

